

資料集成

第七高等学校造士館の村上春太郎先生

福井 崇時 ●名古屋大学名誉教授

はじめに

科学史を研究されている岡本正志教授¹⁾が英国バーミンガム Birmingham 大学で20世紀初頭における英国物理学界の重鎮ロッジ卿に就いて調査中、ロッジ卿宛に日本の物理学者の一人が送った手紙を見付けた。帰国後この物理学者を調べる手立ての中で、福井との接触が始まった²⁾。この物理学者は福井も学んだ鹿児島第七高等学校造士館創設時に就任され戦後までご存命だった村上春太郎教授だった³⁾。

七高の天文部で我々が常用した星座図の著者村上忠敬先生は七高の先輩でもあり、村上春太郎先生のご三男であった。同窓会名簿³⁻¹⁾によれば先生は既に逝去されておられるが、広島大学名誉教授と記載されている。そこで物理学の福井の友人牟田泰三さんに忠敬先生についての情報を依頼し返書を貰った⁴⁾。手紙にはご息女柏原通子さんへの連絡先も記載されていた。岡本氏へ伝えると共に、柏原通子さんとの文通が始まった⁵⁾。これより先、福井は七高弓道部の先輩に春太郎先生や忠敬先生のことを尋ねる手紙を送り、数多くの資料を頂いた⁶⁾。七高開校記念誌等に村上春太郎先生についての記事がある事も判った⁷⁾。

その後、数年間村上春太郎先生のことから遠ざかってしまっていた。ところが、2011年、福井が七高1年生の時の1年先輩で天文部での観測活動だけでなく、西寮の先輩として親しく色々教えてもらっていた守永（進士）晃先輩のご息女との文通が始まり、我々の時代の天文部部員に対する影の指導者、村上春太郎先生と連絡を取り合っておられたらしい人物が守永先輩だと分り、再び村上春太郎先生についてまとめることを思いついた。十数年も経ていたが柏原通子さんに手紙を差し上げると共に、忠敬先生のご長男村上處直氏にも連絡してご祖父についてのご記憶を教えてくださいました。お二人は返書と共に大変貴重な事項を知らせて下さった⁸⁾。

さらに七高同期で西寮での親友、川野克哉氏に東京七高会会報に掲載されているであろう村上春太郎先生についての記述の有無を調査して欲しいと依頼をした⁹⁾。

ご親族からは先生を回想されてのお話やご親族からみた先生像を書かれた手紙を頂いた⁸⁾。さらに、先生の講義を受けた七高生だった者達の憶い出の記述^{6,7,9)}の所在が明らかになった。



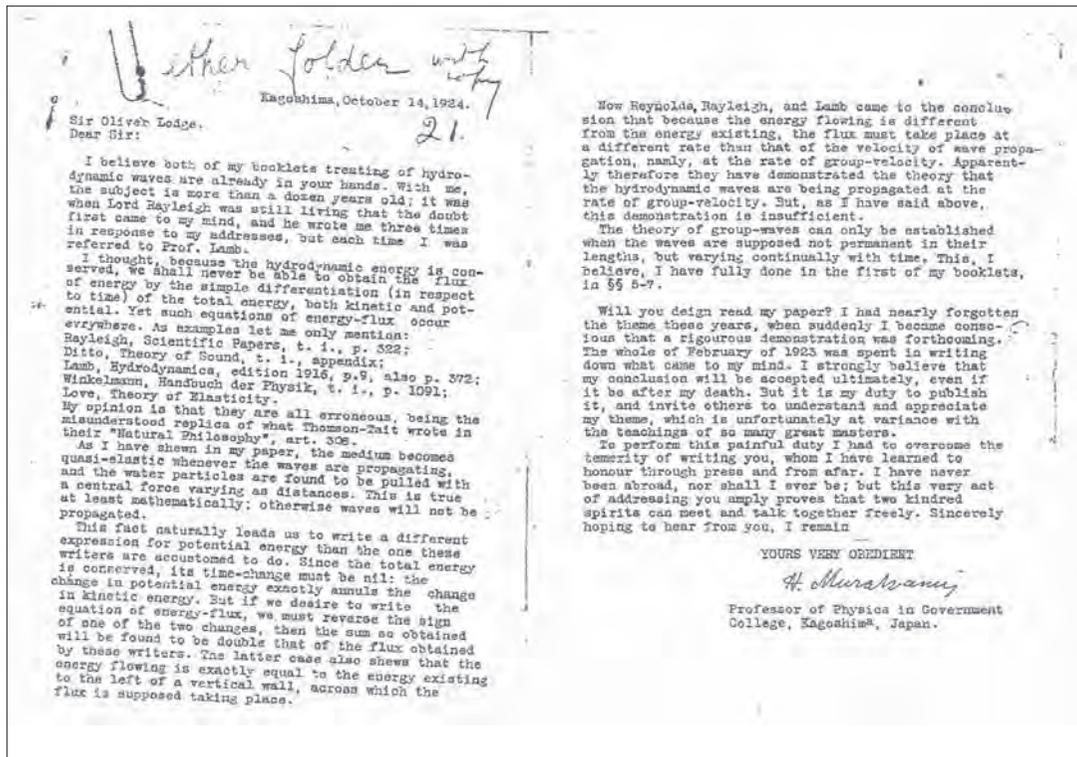
ふくい しゅうじ◎ 1923年、大阪で生まれる。1943年、第七高等学校造士館理甲卒業。1946年、大阪帝国大学理学部物理学科卒業。1962年から名古屋大学理学部教授。1990年に名古屋大学を停年退職し、椋山女学園大学教授。1957年、高エネルギー荷電粒子の飛跡を観測する「放電箱」を開発。1961年、仁科記念賞、1962年、朝日文化賞を、宮本重徳とともに受賞。1985年、紫綬褒章受章。著書に『身近な物理の世界』（1991年）、『粒子物理計測学入門』（1992年）。

それぞれによる「村上春太郎先生」を順次記述する。

S1. 科学史研究者岡本正志教授による「村上春太郎先生」

科学史研究者岡本正志教授（この時、大阪女子短期大学教授，現在，京都教育大学教授）はオリヴァー・ロッジ卿を19世紀後半から20世紀初頭にかけての英国物理学界のキーパーソンとしてきちんと評価しておくべしとしてBirmingham 大学へ赴き調査した。同大学図書館所蔵のO.Lodge スペシャルコレクション中の膨大な書簡リストの中に、1924年10月14日の日付けでH. Murakami がロッジ先生に既に送ってある論文の批評を依頼する手紙を見つけた。日本の物理学者長岡半太郎先生が1904年に英国学術誌に投稿された論文の中で土星型原子モデルにはロッジ先生の考えを受けたと記述されていて其の長岡先生¹⁰⁾は著名人だが、ロッジ先生に直接接触した唯一の日本の物理学者H. Murakamiは全くの無名の人物だった。しかし、その人物像や交友関係などが判れば当時の我が国の物理学界の様子が理解できるのではないかと岡本教授は考えた¹¹⁾。

岡本教授は1997年5月初め、インターネット上に「……鹿児島高校の教授H. コバヤシが英国のSir O. Lodge に論文を送りその後手紙にて批評を依頼した……、このコバヤシについて情報が欲しい」という趣旨を掲載した。福井は岡本教授へ「鹿児島にある旧制の高校は鹿児島高校ではなく第七高等学校である、物理の教授にコバヤシという姓の人はいない、名がH. で始まる物理の教授はムラカミ先生で、H はハルトロウではないか」と知らせた²⁾。実はこのH. コバヤシはムラカミとすべきだったが、当時岡本教授はコバヤシという人物についても調べていたために、入力ミス



をしてしまったのだった。

後日、岡本教授から村上先生がロジックに出された手紙のコピーが送られてきた¹²⁾。[資料1]，[資料2]

岡本教授はH. Murakamiに就いて調査の結果を含めて科学史学会に於いて村上春太郎先生を紹介した¹³⁾。1998年5月に愛知大学豊橋校舎で開催された日本科学史学会第45回年会で「謎のH. Murakami-ロジックと交流した日本物理学者」と題して発表した。

その予稿集レジュメ¹⁴⁾によると、村上春太郎先生は流体力学理論への疑問と自説の主張と論文の評価を依

頼している。ロジックのこの書簡に対するA4版5頁にわたる返事の下書きがあった。丁寧な文面で村上説に一定の理解を示めされている。村上先生は七高の名物教授として学生の信頼が厚く「今に至っても記憶が鮮やかに残り、学問の深さを情熱を持って指導された」と思い出が掲載されている七高会会報がある。我が国では無名の村上氏ではあるが、月の裏側のクレーターに murakami と付けられ公に名を留められていることから、研究者として国際的に一流の領域にあったことが判る。村上先生の業績を歴史的に評価し直すことによって我が国の近代化の真相を深いレベルで捉え直すことができるにちがいない、という趣旨である。

日本人の名前が付けられた月のクレーターを [表1] に示す。岡本教授から村上處直氏に提供された月の裏側のクレーターに人名を付した写真の写しを村上氏から送られて来たのでここに示す。[写真1]には月の裏面全体と幾つかのクレーターに付された科学者の名前が示されている。[写真2]はMURAKAMI クレータの付近の拡大写真。この2枚の写真は岡本教授が村上處直氏に送られたもの。

§2. 七高開校記念誌に記載されている「村上春太郎先生」

§2-1. 第七高等学校造士館50年史⁷⁻¹⁾

1970年10月に刊行された「一北辰斜にさすところ― 第七高等学校造士館50年史」の初め数十頁は写真集で、その頁19に望遠鏡を操作されている村上先生を写した写真がある。

第四章教授群像の“数学・物理・化学・自然科学の教授たち”の項に、先生に就いて以下の記述がある [202-203頁]。

表1 月のクレーターに付けられた日本人の名前

Asada	麻田剛立 (江戸時代の数学者1734-1799)	7.3N	49.9E
Hatanaka	畑中武夫 (1914-1963)	29.7N	121.5W
Hirauama	平山清次、信 (天文学者清次キヨツグ1874-1943 信シン東京天文台2代目台長 1868-1945)	6.1S	93.5E
Kimura	木村栄ヒサシ (位置天文学者水沢観測センター初代所長 1870-1943)	57.1S	118.4E
Murakami	村上春太郎 (1872-1947)	23.3W	140.5W
Nagaoka	長岡半太郎 (1865-1950)	19.4N	154.0E
Naonobu	安島直円アジマナオノブ (和算創始者1732-1798)	4.6S	57.8E
Nishina	仁科芳雄 (1890-1951)	44.6S	170.4W
Onizuka	エリソン・オニヅカ (宇宙飛行士) Ellison Shoji Onizuka (1946-1986)	36.2S	148.9W
Yamamoto	山本一清イッセイ (天文学者、測地学者花山天文台長1889-1959)	58.1N	160.9E
Yoshi	よし	24.6N	11.0E
谷に付けられた日本人の名前			
Reiko	れいこ	18.6N	27.7E
Taizo	たいぞう	16.6N	19.2E



by M.Okamoto 1998.5.24

月の裏面

- | | | | |
|-----------|---------------|--------------|---------------|
| 4. グランペール | 44. フィッツジェラルド | 40. マッハ | 41. 畑中 |
| 6. 長岡 | 12. ヘヴィサイド | 34. コロレフ | 37. ヘルツシュプルング |
| 8. メンデレエフ | 16. エイトケン | | 36. パビロフ |
| 15. ガガーリン | 20. ライブニッツ | 29. オッペンハイマー | X. 村上 |
| 17. パヴロフ | 28. 仁科 | 30. アポロ | 32. チェビシエフ |
| 22. 木村 | 23. ブランク | | |

写真1



Murakami, H.

From The NASA Atlas of the Solar System, Cambridge U.P., 1996
by M.Okamoto 1998.5.25

写真2

村上春太郎教授は数学と物理を教えた。愛媛の出身。赴任に当たって、何を担当するかと聞かれて「何でもやりましょう」と答えて岩崎館長¹⁵⁾を驚かせたが、事実、独学で英、独、仏の三ヶ国語のほか、数学、物理、化学の教授免状までもっていたという“何でも屋”であった。科学者であり、詩人であり、且つ宗教家であったが、天文学のことはとくに造詣が深く、お堀ばたの石垣にたたずんで天を仰ぎ星と語った。そして館長の心をうごかし七高天文台を建設させた。写真3〔福井所有の写真〕は設置された赤道儀が備わっている望遠鏡である。天体研究に熱中するためか俗世間の方は留守勝ちで、全く辺幅を飾らず、誰とも会釈ぬきである。「専門家は不具である」と科学者に人格円満なる人の少なきを嘆じ、生徒に名誉にのみ走る心を戒める。講義は唯心論を論じ、芸術を賛美し、話の一言一句が詩的で、楽しみにして待たれる。フランスの数学会員〔天文学会員：福井の註〕で往年の桜島爆発¹⁶⁾の際は詳細にその報告がフランスの雑誌に掲載されていた。年中毎朝冷水浴を欠かさず、それを健康法とした。菓子好きは有名で、自分で駄菓子を買って帰り、晩の目ざましにするのである。明治三十六年に赴任された数少ない名誉教授の一人である。

天文台について

天文学会の項 (649頁)

昭和二年末、本校創立二十五周年記念として創設せられた天文台の完成⁷⁻²⁾と共に七高天文

学会が創立せられた。今が満十四年を経過せんとしている。天文台建設は初め文部省に予算を要求せられたるも容れられず遂に本校教授、現名誉教授村上春太郎先生初め、各先輩職員方のご尽力により、目出たく白亜の殿堂は完成したのである。赤道儀（望遠鏡架台）は初めドイツに注文されたが世界大戦により注文書が返送されてきたので改めて、イギリスのオットウェイ社に注文されたとのことである。望遠鏡はドイツ・ツァイス製

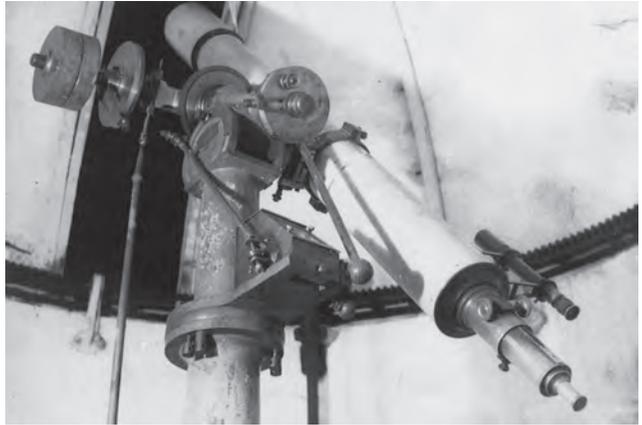


写真3 ドイツ・ツァイス社製6インチ屈折望遠鏡とオットウェイ社製赤道儀

六インチ屈折鏡 [写真3]。その他四センチ子午儀、クロノメーター及び国産六インチ反射鏡が物理教室に備えられてある。天文台完成するや村上教授の子息、村上忠敬等の発意により七高天文学会が創立され、七高研究団体の魁となった。……本年（※福井の註、昭和16年）は五年ぶりに日食に相会し、当日はあいにく猛烈な曇天で絶望していたが、幸いにも日食の頃よりわずかに雲が薄らぎ、かろうじて投影法による写真数十枚を得た。また初触の観測は出来ず終触のみ測定した。気象観測及び地磁気観測は予定通り行い、これらの結果については団報に発表された。また創立四十周年記念文化展覧会にもこれらの結果は発表された。……

§2-2. 開校九十五年記念誌⁷⁻²⁾

33頁から始まる造士館沿革概要の項は七高教授 排球部長 増村宏（四高卒）の執筆で39頁に一、七高造士館史（昭和五十二年十月二十二日）

戦前期

大正十一年（一九二二）十月二十五日には開校二十五周年、藩学造士館創設一五三年記念式典を挙行した。この時に記念祝賀会より天文観測室が寄贈され、昭和二年八月に完工した。

と記述されている。

§3. ご親族が回想された「村上春太郎先生」

東京在住で七高弓道部の先輩、中柴武雄氏から村上忠敬先生の著書『秋津供養』に記述されている「村上春太郎伝（一八七二—一九四七）」のコピーを頂いた⁶⁻²⁾。

村上忠敬先生は春太郎先生のご三男で、1907年（明治40年）7月23日に出生、昭和3年七高理甲卒、京大理、宇宙物理、広島大名誉教授、広島女学院大を歴任され、1985年（昭和60年）2月11日に逝去された。

「村上春太郎伝（一八七二—一九四七）」は「天文学雑誌」（1947）にも掲載されている。

村上忠敬先生のご長男^{すみなお}處直氏、處直氏の妹さん柏原通子さん、村上春太郎先生ご夫妻のただ一人

の娘さん、宮永雪子さん（平成18年（2006年）2月18日ご逝去）のご息女、茂木啓子さんから頂いた手紙とメール⁸⁾にてご祖父母についてのご回想が送られて来た。

まず、「村上春太郎伝（一八七二—一九四七）」を抜粋し、次に處直氏から送られた「祖父・村上春太郎」を記載する。§ 4-3.にてご親族による村上春太郎像を福井に伝えられた事項を纏めて記載する。

『秋津供養』は忠敬先生による1977年季夏発行の私家版でこの本に就いての説明は後です。

§3-1. 村上忠敬先生による「村上春太郎先生」

「村上春太郎伝（一八七二—一九四七）」

父春太郎は去る六月十日、恰も時の記念日の朝、忽然として急逝した。生涯の大部分を七高物理学教授として過ごしたが、一生を通じて天文学徒と意識し老齢尚いささかも屈する所なく太陰運動論の研究途上に斃れた。その一生の概略を紹介し父の霊を慰めたいと念願する。

明治五年（一八七二）一月二日、愛媛県越智郡東伯方村大字有津¹⁷⁾の庄屋、村上重吉の長男として生まれた。小学校では飛躍進級、明治十六年（一八八三）単身今治中学校に入学、この中学校が廃止され松山中学校第八学級に転じた。この中学校も明治十九年（一八八六）廃校、翌二十年上洛し、同志社本科二年二期に編入された。十六才の時であった。新島襄の感化を受ける。翌々年病を得て帰郷。明治二十三年（一八九〇）十九歳の時、再上洛し同志社理科学学校入学、ユンケル Emil Junker 氏の指導で天文学へ向かい校舍屋上で十センチ望遠鏡で天体観測をする。レルネデ氏デントン嬢¹⁸⁾とも親しくなる。明治二十五年（一八九二）四月から六月、同志社女学校で化学を講じる。

明治二十六年（一八九三）四月、仙台の東北学院長シュネーダー氏の招聘を受け理科学学校の教師となり満三ヶ年在職。只管天文学に精進し俸給全額でWatsonのTheoretical Astronomyを購入した。明治二十九年（一八九六）三月、仙台の気候が身体に合わず健康を害し退職。同年四月愛知一中の前身名古屋中学校に転じた。この年ベルリン天文学会員及びフランス天文学会員に挙げられた。

北海道で皆既日食〔表2〕があるので明治二十九年（一八九六）七月二十日に、トッド David Todd 夫妻の日食観測隊に随って枝幸〔※福井による註 宗谷岬よりオホーツク海側を海岸に沿い約80キロメートル程の所にある町〕に赴き通訳を兼ね主に計算を手伝う。トッド夫人の日食観測紀行“Corona and Coronet”の中に父を“his lips are pale and thin”と述べているから父は余程無理をしていたようである。

明治三十年（一八九七）岐阜中学校に転じ三十一年（一八九八）同志社に帰って教鞭をとる。最初は数学を講じ三十五年（一九〇二）から物理学教師となる。三十三年には腹膜炎にて開腹手術を受け須磨の浦で療養、三十四年（一九〇一）快癒し十二月九日古川のぶと結婚した。

天文学の普及に着目し、村上式新式望遠鏡を島津製作所に製作させ、明治三十五年（一九〇二）に著書「天文学一夕話」を島津源蔵氏の好意で出版した。この書の最後の章に父の宇宙観乃至人生観とも称すべき思想が溢れており根本に於いて晩年の思想と符号している。

北海道日食行の際、デランドルに随行した寺尾寿¹⁹⁾を知って日本天文学会創立に関し相談を受けた。

表2 過去に日本で見られた日食（抜粋）

皆既日食の年月日と地域（抜粋）

年月日	地域	始時刻	最大	終時刻	
1887年8月19日	福島—埼玉				
1896年8月9日	北海道	宗谷岬	13:21	14:32 (1.01)	15:38
		納沙布岬	13:29	14:39 (1.00)	15:44
		札幌	13:25	14:37 (0.97)	15:43
		東京	13:38	14:50 (0.84)	15:56
		大阪	13:36	14:48 (0.76)	15:55
		鹿児島	13:38	14:50 (0.62)	15:55
1936年6月19日	北海道	宗谷岬	14:05	15:18 (1.01)	16:23
		納沙布岬	14:13	15:24 (1.01)	16:28
		札幌	14:08	15:21 (0.96)	16:27
		東京	13:38	14:50 (0.84)	15:56
		大阪	13:36	14:48 (0.76)	15:55
		鹿児島	13:38	14:50 (0.62)	15:55
1941年9月21日	与那国島	那覇	12:23	13:53 (0.93)	15:16
		与那国島	12:14	13:46 (1.00)	15:12
		鹿児島	12:26	13:50 (0.77)	15:09
		東京	12:45	14:00 (0.58)	15:08
		大阪	12:36	13:54 (0.65)	15:07
1943年2月5日	北海道	宗谷岬	06:50	07:52 (0.98)	09:03
		納沙布岬	06:46	07:53 (1.00)	09:06
		札幌	06:47	07:48 (1.01)	08:59
		東京	06:39	07:36 (0.86)	08:46
		大阪	06:54	07:32 (0.82)	08:39
		鹿児島	07:09	07:26 (0.71)	08:28

日食に関する情報は次を開いて下さい 上記の表は (1) のデータから抜粋した

(1) <http://star.gs/njkako/nako.htm>

(2) http://star.gs/cgi-bin/scripts/nissyoku_i.cgi

(3) <http://www.astroarts.co.jp/products/stlnav8/>

第七高等学校は明治三十四年（一九〇一）に設立された。時の文部大臣菊池大麓に認められ明治三十六年（一九〇三）同校に赴任する。同年九月、母と兄晴明と勉とを伴って海路鹿児島に着く。爾来四十四年間ここを安住の地とした。初代校長岩崎行親の信任を受け愉快的教師生活が開かれた。

城山麓の山下町の寓居は化学の久保田温郎教授と隣り合わせ。父は学校から帰るとヴァイオリンの練習、“全く閉口した”と氏は述懐しておられる。父は学校の音楽会などで演奏した。絵画部なども指導していた。甲突川畔の加治屋町に転居し私と弟良貞が生まれた。明治四十五

年（一九一三）次兄勉が病死したことは父に非常な打撃であった。鷹師町に転居し大正二年妹雪子が生まれた。

大正三年（一九一四）桜島大噴火¹⁶⁾。父は県及び市から調査を依頼された。昭和三年（一九二八）県立図書館から「桜島噴火記」として刊行された。

この頃七高生で父の弟子となり熱心だったのは後の有機化学者田中宗愛博士だった。

大正三年に常盤町へ転居したが、翌年原良村に引っ越す。この家は薩藩国家老小松帯刀邸で、切腹・入水等があったため幽霊が出るとうるので借り手がなかったのを、父は“幽霊が出れば面白い、よく研究しよう”と云いながら転居した。山林もあり庭には“臥龍梅”をはじめ梅樹が多く、「梅見」客が来る程であった。高所にあったから景色もよく父は読書三昧、自然にも親しみ和歌なども多く詠じた。田圃道をはるばる来て15センチ望遠鏡で天体観測に来る七高生達の外には、「おもと」魚屋や隣家であった池田氏など限られた人が出入りされた。この田圃道は父が毎夕子供達を伴って規則的に散歩する道であり、家庭教育の場でもあった。弟重康と清和が生まれた（清和は三歳で病死）。

大正十一年（一九二二）草牟田町に転居。その後町内を二三回転居。この頃父は流体力学の研究に従事し、大正十二年には“On the Hydrodynamic Group-waves and the Wave-Energy.”正統二篇の論文を自費出版、欧米の学者に送った。七高生としてよく家に來られた日高孝次氏に父は喜んで流体力学の話をした。

昭和の初め頃は高等学校では“原書”を教科書に使っていたが、漸次日本語の教科書に変わりつつあった。父は教授ノートを基にして昭和三年（一九二八）に「物理学原論」を著した。その頃から辞任までの期間は物理学教授として円熟した時代だった。

兄清明が台北で発起した台北天文同好会機関誌「南の星」に毎号のように天文や人生観などの随筆的なものを投稿して楽しんでた。七高天文学会会誌にも稿を寄せていた。

父は元来外国語に興味を持ち英・独・仏・伊語に親しんでいた。どういう動機からか、この頃スペイン語を勉強しスペイン文学などに深入りした。

一方絵画の方は油絵は若い頃だけ、普通は淡墨絵に着色する独特の絵を書いていた。この頃はパステル画に熱中し、気に入った景色や人物画を書斎の四囲の壁に所狭きまでに掛けて居り、余ったのは他の部屋に溢れる程だった。天文学の研究は寸時も怠ることなく、引退後に研究すべき太陰運行論の準備として、天体力学に主力を注いでいた。

昭和十二年（一九三七）七高を辞して名誉教授に推された。天文学を静かに楽しみつつ研究する生活に入った。朝六時に起床、朝食後十時まで畑を耕し、五時までは天体力学、特に太陰運行論（父は“月行論”と呼んだ）の研究、夜は細かい読書は避けて眼を休ませ九時には就床する極めて規則正しい生活を送って来た。その頃、研究の進捗状況や研究上の障碍などを、いつも手紙の度に細々と記してあり、絶えず私はその方面の指導を受けた。私は事情があつて天体力学に熱中出来なかったことは、父を淋しい気持ちにさせたのではないかと思われる。父の述懐に

“淋しさを 何に喩えん かりがねの 秋の夜ぞらを 独り行くかな”

と詠じてあつて、私の不幸を詫びねばならない。

健康には意を用い、畑の耕作は身体の運動が目的、精神の休養は文学その他の読書。昭和十

八年（一九四三）恒星社から「フラムスチード天球図譜」が刊行された際、土井氏の依頼で仏文の翻訳をし、次いで天文随筆を集めた「天文と地象」を世に送った。この書は「天文・地象・人生」とでもすべきもので、学問の各般に亘って深く学んだ父の縦横談である。太陰運行論の研究は第一期の十年間の終わりに一通り完成、清書されたノートは、不幸にも昭和二十年六月十七日に戦災にて焼失した。然し、父は屈することなく再び想を煉り草稿などを参照し書き直して学会に発表の機会を待っていた。この論文“Theory of Perturbations of the Moon.”はその儘になっている中に父は世を去った。

六月五日畑の草取りなどをし、土井氏より依頼の「天文と地象」の正誤表を作るなどしていたが、夕方腹痛を覚え翌日より病床にふし、七高卒の家弓医師の診察を受けたが十日午前八時二十分、死を自覚することなく安らかに眠った。

父の生涯を年譜的に述べるに止めたが、人としての父、学者としての父について詳しく語る機会を得たい。父は名利に恬淡だったから私がこのように書くのさえも、何だか父の心に背く感じがしないでもない。

§3-2. 村上處直氏による「村上春太郎先生」

村上忠敬先生のご長男で現在は防災都市計画研究所会長をされている村上處直氏から大変興味ある書簡が送られてきた。ここにその全文を記載する⁸⁻⁸⁾。文中の註番号は福井による註である。

祖父・村上春太郎のこと

1) はじめに

村上春太郎は五男一女（次男は夭逝した）〔福井による追記：ご長男から順番にお名前を記します：清明、勉（死亡）、忠敬、良貞、雪子、重康、清和（3才で病死）〕を持ち、その三男に伊能忠敬の忠敬（タダヨシと読む）をつけ将来天文学者となるべく育てた。父は一度も迷うこともなく自分は将来天文学者になるものと勉学に専念したようだ。私は忠敬の長男として、昭和10年名古屋に生まれた。父は昭和16年の夏、広島高等師範学校の教授となり、広島に移った。名古屋では名古屋高等工業専門学校の物理学教授をしていたが、広島高等師範に天文学講座があることを喜んでいて。当時天文学教室があるのは東京大学、京都大学、広島高等師範だけだったと聞いている。私は広島高等師範付属小学校に通うようになったが、まもなく大東亜戦争が始まり国民学校と呼ばれるようになった。父は戦争の混乱を予想してか、出来るだけ早く祖父のいる鹿児島や本籍地愛媛県越智郡伯方町¹⁷⁾か、曾祖母がいる今治を訪ねる計画をたて、昭和17年の春休みに、姉、芳野と三人で旅をした。その時初めて鹿児島の祖父に会った。玄関で祖母が迎えてくれたが、祖父は研究中と言うことで毎日の予定通りの時間が来るまで待たされ、時間が来てようやく面会が許された。

子供心に不思議な感じを受けたが、祖父春太郎の日課はきわめて規則正しく時間通りに生活していたようだった。

祖父の部屋に招き入れられた時、机に向かって正座をしていた祖父は微笑んでいた。本棚がいっぱいあり、その隙間に小さなパステル画が所狭しと飾ってあった。障子から明るい光が入っている座敷だった。そして私たち三人と祖父母は庭に出て写真を撮った。

その祖父が亡くなった昭和22年6月10日がなんと「時の記念日」だったことが印象に残っている。

私の名前は祖父の命名である。祖父はかなりの外国語を自由にこなしていたが漢語にも詳しく命名してくれた。私と同じ名前の人にこれまでいまだ出会ったことはない。お蔭で、私の名前を人に教えるのに非常に苦労している。

2) 二冊のノート

父は昭和25年の5月に肺結核になり、大手術を受け肺が半分以下の容量しかなくなった。その手術の時、危篤だと家族が呼び集められたが、何とか手術が終わり、麻酔が覚めたとき私に「夏休みになったら鹿児島島の祖父の家にあるお祖父さんの手書きの二冊のノートを貰ってきて欲しい」と頼まれた。それが祖父の力作「月行論」のノートだった。夏休みになり病院に見舞いに行くと、再び月行論のノートのほか祖父の書斎にある貴重な外国の天文学の専門書も持ち帰るようにと頼まれた。病院のベッドの上で寝たままで、読みやすいきれいな字で、ドイツ語やフランス語、英語の専門書の名前を何冊も書いてくれた。それはみかん箱二箱になり鹿児島駅からチッキで出したのを覚えている。私は高校一年生で英語のスペルぐらいは分かるが、英語が苦手で心配だったが、いずれの専門書もみつかり、驚いた。それは祖父の持っている専門書を父が諳んじていたからである。なにか魔法にかかったような気がした。広島と鹿児島と離れた場所で生活していて祖父の書斎を毎日見ている訳でもないのに、探すのに困った記憶が無い。とても自分には出来ない離れ業だと思った。今日のように通信が発達していない時代の話である。

その二冊のノートがその後どのように扱われたかは、知らなかったが1984年の夏休みに広島に帰ったとき、父がとにかく印刷物にして世界中の国立図書館や天文台、お世話になった所に送っていることを聞いた。その反響としてソ連のレニングラード天文台の台長から「驚き」の手紙が届き、祖父の名前を小惑星につけるなど、何かしたいと書かれていたと父が話してくれた。その後間もなく父は帰宅途中の道で倒れ、そのまま入院して7ヶ月後の1985年2月11日に呼吸器不全で亡くなり、その後の祖父の論文への対応は出来ないままだった。また私が喘息で入院している1994年の6月に広島の己斐上町の住宅の引越しがあり、父の気になる祖父の資料の処理が出来なかったのが今思うとまことに残念である。その後1997年の正月に父の教子で広島市こども文化科学館のプラネタリウム解説をやっていた佐藤健氏の年賀状に「君の祖父の名前が月の裏面のクレーターに付いている」[表1]との知らせがあり、その情報が載っている、“The NASA Atlas of the Solar System”という図版を丸善本店で求めた。丁度それと前後して、科学史研究者、大阪女子短大(当時)の岡本正志教授から手紙が舞い込んだ。岡本教授が英国パーミンガム大学でオリバー・ロッジという物理学者の書簡類を調べていて、村上春太郎先生に行き当たったという知らせと、その書簡のコピーが送られてきた。それは流体波動力学に関する内容で、英国の物理学者ロッジ博士に祖父が質問状を送りつけたものだった。そして岡本先生から村上春太郎先生はどのような方ですかと言う質問となにか資料がありませんかと言う質問があり、孫としても祖父のことを知る必要が起こってきた。もっと早く父や、叔父叔母から祖父に関する話を聞いておけば良かったが、ようやく一番若い重康叔父さんにヒヤ

リングする機会ができた。その叔父も既に亡くなっている。

3) 祖父のこと、重康叔父から聴いたことを加えて

祖父は14歳の頃、島の若い衆と船で京都へ向かい、同志社のイギリス人物理学者の教師の元で学び、まもなく教える側になっている。暫くして英国人教師が帰国し、物理学教室が閉鎖され、仙台の東北学院の教授に招聘された。しかし仙台の気候が合わず再び京都に戻り同志社女子大の創立に関わり（その当時祖母と会い恋愛結婚をした）、まもなく鹿児島県の第七高等学校の創立時の学長に乞われ教授となり、その後亡くなるまで鹿児島を離れなかった。

祖父が仙台から逃げるようにして離れた理由は、草アレルギーの性ではないかと考えている。私も子供の頃名古屋で喘息に苦しみ、広島に移り喘息を忘れて生活していて、横浜国大に奉職するようになって、喘息になりその原因が分かるまで6年間苦しんだが、国大キャンパスに生えている明治時代に日本が20種ぐらい輸入した外来牧草の一本が私の喘息アレルギーのもとだったので、祖父も同じ草アレルギーではないかと考えている。鹿児島に住むようになった時、祖父がここは気持ちよく生きていけると話したということも聞いている。

重康叔父さんの話は、それまでなんとなく噂話的に聞いていた祖父に関する話が全部真実で、驚きの連続だった。外国語は7ヶ国語（英、仏、独、伊、西、漢、葡）を自由に書いて、話して、読めたこと。しかも一度も外国には行かなかったこと。このことはロジ博士の書簡にも書いている。祖父の弟はシカゴ大学の医学部に留学していたが、連絡がなく祖母が心配したので、「透視術」を行い、ほぼ弟の動きを類推し帰国して確かめたところ、アルバイトでビルの窓拭きをやっていた事が分かったこと。当時、幽霊の研究をやっていた外国の物理学者ともその趣味で交流があったこと。それが高じて幽霊が出没する噂のあった薩摩藩士の小松屋敷を借りたこと。（結果的に幽霊には遭うことは出来なかった）

鹿児島県錦江湾にドイツなどの外国の軍艦が寄港すると艦長が春太郎祖父に会いに来るためだったこと。特にドイツの東洋艦隊の、マルドック艦長とはよく文通しており、年一度ぐらい家に来ていたこと。祖父は日本より外国で有名だったこと。大正3年に桜島が噴火して、翌4年英国皇太子が難しい外交問題で訪日した時、桜島を視察することになり皇太子だった昭和天皇が同伴され鹿児島に来られた。そのとき解説と通訳を引き受けたのが祖父だった。

鹿児島県の桜島噴火災害報告書のかなりの部分は祖父が関係していたようで、そのレポートをフランスの天文学会（会員だった）などに訳して送っていたこと⁷⁻¹⁾ [§ 3-1]。さらに絵画の展覧会を開いたり、バイオリンの演奏会を開いたり、原良の里の御殿（小松刀帯屋敷別邸）に天体望遠鏡を持ち込み（ハレー彗星の観測のため購入、七高の天文台未完成）定期的に観察会を開くなど、大勢の七高生を招くなどしていた。そのくせ他人との付き合いは極めて悪くほとんど自宅の書齋でスケジュール通りの生活を続けていたこと。また Encyclopedia Britannica は全巻読破してほとんど記憶していた話などいろいろ聞いた。自分の時間は読書と研究など自分の知識欲のために使っていた。

4) 昭和天皇とのかかわり

叔父の話を聞いたとき、1986年に日本建築学界100周年記念祝賀会のとき今の天皇が皇太子

として出席し防災問題をスピーチされた。その後祝賀パーティーがあったが、皇太子が誰とも話さず淋しそうだったので学会の関係者が私にお相手をするように誘った。私は仕事で少し遅れて参加したので皇太子殿下が防災の話をされたことは知らなかったが、防災は私の専門なのでお相手をした。その時丁度1985年のメキシコ地震があった翌年で、メキシコで現地のメキシコ警察次長にエスコートしてもらって視察した者でなければ分からないような事象まで質問されるので不思議になり、「あなたは何故私のことをそのように理解しているのか」と質問申し上げたところ、少し時間を置いて「今の天皇もあなたのことは存じ上げています」とお答えになった。天皇と祖父との関係を知らなかった私は、おそらくテレビによく出ているからだと考えていた。しかし叔父の話を聞いて驚き、ようやく理解できた。今の天皇はその三日後に国際救助隊の発会式に名誉総裁として列席され、最前列で私の4人離れた位置だったが、目の前で展開される訓練の様子が、陛下と数日前お話したと乖離していたので、陛下の方を見たら陛下も私を見て微笑んでおられた。それはメキシコで地震後8日間の「静寂」を創った話である。[※注 震災後にヘリコプターやマスコミ、救急車の出す音響で、助けられる命も助けられないというので、救助のための“静寂”を当時の大統領が提案した]

昭和天皇は皇太子時代お忍びで鹿児島に来られ、原良の里の小松屋敷（別邸 - 坂本竜馬の新婚旅行宿泊先）まで来られたようだった。その後摂政になられてからは鹿児島の陸軍連隊の閲兵式に来鹿された時など祖父は呼ばれ、祖父は迷惑そうに燕尾服に身を包み閲兵式に列席していたようだ。祖父は昭和天皇の若き心を捉え、機会あるごとに呼び出されたようだ。天皇になってからは毎年皇居に招かれ一日を過ごしていたようだ。祖父の専門は物理・天文だが植物、昆虫など何でもよく理解して的確に説明する能力（博物学）を持っていたので、天皇にとって楽しい一日だったと思われる。もっと驚くことは外遊から帰国した友人とその外国の街角の話が出来たという話である。昭和の時代に出来た初めての文化勲章を昭和天皇に薦められたが、お断りしている。とにかく想像を超えた人物だったようだ。外国も含めていろいろな大学から招聘があったようだが鹿児島から離れることはなく生涯を終えた。

2011年8月2日記 村上處直

§ 3-3. ご親族による「村上春太郎先生」

柏原通子さん、村上處直氏、茂木啓子さんの手紙及びメール⁸⁾にて福井に伝えられた話をまとめて村上春太郎先生の姿を描く。

中柴武雄氏の「村上春太郎先生」[§ 5-1]と前項の村上處直氏の「祖父・村上春太郎のこと」の3)に、アメリカに留学されている先生の弟さんの姿を精神統一で見たとある。後日判ったのは先生が見られた姿は弟さんが学費が不足していたので窓拭きアルバイトをしていた時だった。この弟さんは、茂木啓子さんのお手紙では、医師となり娘さんを連れて帰国、伯方島で開業されておられるとのこと。もう一人の弟さんも米国に居られたが交通事故死されたとのこと⁸⁻⁵⁾。後日送られてきた茂木啓子さんの手紙⁸⁻⁹⁾には、伯方島のお二人は既に逝去されておられると書いておられる。

茂木啓子さんのご回想では「祖父と祖母は明治三十四年という時代に恋愛結婚をしている。また鹿児島で並んで歩いて、回りの響感をかったことがあると母雪子さんから聞いた」と書いておられる⁸⁻⁵⁾。

「村上春太郎伝」に記されている“同志社に入学し新島襄の感化を受ける”そして“デントン嬢と親しくなる”の件を穿って想像すると、感化を与えた人物は新島襄（ニイジマ・ジョウ Joseph Hardy Neesima）と新島八重との二人であろう。特に女子部創設の作業をしている新島八重に協力したデントン嬢と親しくなれば、その傍らで働いていた古川のおとも親しくなられただろうし、新島襄、八重夫妻にも緊密に接触されたと思う。また、キリスト教徒である新島夫妻の日本離れした日常の行為からも影響を受けたと考えられる。新島夫妻は因習の濃い京都の街を二人相乗り人力車で走っていたともいわれている¹⁸⁾。村上、古川両人は新島夫妻のこのような行動に接していたから、鹿児島市中を二人が並んで歩いた。昔からの慣習を頑に固執している鹿児島の人達が此の村上夫妻の行動を見てどのように噂をしたか想像できる。

お二人は同志社時代からヴァイオリンを弾いておられた。七高に赴任され山下町のお宅でお二人は稽古をしておられたらしく、隣家の久保田温郎先生を相当困らせたことは確かである [「村上春太郎伝」]。七高ではヴァイオリン演奏会を度々開いておられる [§ 4-2.]。

ご長男の晴明さんは七高同窓会名簿によれば理甲卒だったし、「村上春太郎伝」には晴明さんが台北で創設された台北天文同好会の機関誌「南の星」に先生は毎号のように天文や人生観などを投稿されていたとあるから、東大英文科に進まれても天文に関係されておられたと思っていたがどうもそうではなかったようである⁸⁻³⁾。

ご三男に伊能忠敬の忠敬^{タダヨシ}と命名されたのは、日本の地図を作った伊能忠敬のように、天体の地図、星座図、を作る天文学者にしようとの思いからだと言われたと記されている⁸⁻³⁾。忠敬先生は春太郎先生のご期待通りの道を歩まれた。天文台は昭和2年8月に完成しているから、七高卒業までの約半年、この望遠鏡で星の観測をされたであろう。昭和五年に天文台の望遠鏡と共に撮られた先生の写真を處直さんが送って来られた。[写真4]



写真4 天文台ドーム内の望遠鏡と村上先生
村上處直氏から提供された写真。写真には1930とあるから昭和2年8月に完成した後、昭和5年に撮影されたと思われる

先生の此の姿を「怖い顔で望遠鏡の前に座っている祖父は板垣退助に似ていて、親しみを感じなかった」と柏原通子さんは手紙に書いておられる⁸⁻²⁾。

大正二年生まれの雪子さんの後に男児が二人生まれた。雪子さんが唯一人の女儿だったので、先生ご夫妻からも兄たちからも大層大事にされたようだったと啓子



写真5 良貞さん、雪子さんとノブ・春太郎ご夫妻



写真6 良貞さん、雪子さん、忠敬さ、重康さんとノブ・春太郎ご夫妻



写真7 忠敬さん、宮永雪子さん、春太郎・ノブご夫妻、宮永啓子さん



写真8 啓子さんを抱かれた春太郎先生



写真9 先生が描かれたパステル画 (27×22cm)
この写真では横が少し切られている

さんは書いておられる⁸⁻⁵⁾。

啓子さんは先生が亡くなられた時(戦後2年目)は小学4年生だった。当時は宮永家のある延岡と鹿児島間は簡単には往来できず、就学前に逢われたのが最後だったとのこと。延岡の家に春太郎先生ご夫妻と忠敬さんが来られた時に、庭で幼い啓子さんを抱いておられる写真を茂木啓子さんが送って来られた⁸⁻⁵⁾。後日送られてきた手紙には雪子さんをご兄弟とご一緒にの写真が同封されていた[写真5]、[写真6]。[写真7]、[写真8]は啓子さんが春太郎先生に抱かれている写真。[写真9]は村上先生が描かれたパステル画。絵の原寸は縦27センチ、横22センチ。

處直氏も書いておられるように、孫でもご祖父に会うには決まった時間まで待たねばならなかったし、啓子さんは障子の外から「おじいさま、入ってもよろしいでしょうか」と声を掛けて、良いと言われてから入るように言いつけられていた。幼な心にその厳しさには辟易したと書いておられる⁸⁻⁹⁾。

§ 4. 七高生の時に授業を受けた者の思い出の「村上春太郎先生」

七高運動部の会報⁶⁾や東京七高会の会報^{6,9)}そして開校記念誌⁷⁾に先生の講義を受けた先輩達が思い出の中の先生の印象を書いておられる。それらの幾つかを入手したのでここに順次記載する。

§ 4-1. 中柴武雄氏(昭和6年理乙卒)による「村上春太郎先生」(七高弓友会会誌『弓友だより』)

村上春太郎先生は運動部の弓道部の顧問をされておられたので、昭和六年理乙卒の中柴武雄先輩に先生の事を尋ねる手紙を出した。その返書で中柴先輩は、忠敬先生著の「村上春太郎伝」の写しと共に七高弓友会会報に記載された稿の写しと先生についての種々のことを知らせて下さった⁶⁾。

以下に、七高弓友会会誌『弓友だより』第3号(昭和55年)13頁—19頁 中柴氏記述の 薩南の憶いで「村上春太郎先生のこと」を抜粋する⁶⁻¹⁾。

ご令息忠敬さんの村上春太郎伝(「秋津供養」所載)により年代を合わすと私が教えを受けた当時先生は五十代半ば、学問的にも円熟の境地、講義は実に面白かった。毎日草牟田のお宅から城山を越えて登校された。冬には裾の長い外套で颯爽と歩いて来られた。二年になり階段教室での講義、開講に当たり先生の言葉で記憶に残っているのは「あまりピンタを使わないように。大学に行ってから専門科目に打込まねばならぬからそれから頭を使えばよい。今から必死に勉強する必要なし。頭脳を酷使するとその時になって息切れする。」と。「学問は楽しんでやるもの。勉強は試験の点数などを苦にして机にかじりついてやるものではない。」一方では受験で疲れた頭を解きほぐし高い学問の本道を示すのが一番大切だと考えておられた。「物理学原論」は昭和三年の出版、恰も私達が先生の講義を拝聴し始めた時。先生独特の表現が織り込まれていると清原君が指摘している。同期で京大医学部へ入った林英弼君は先生の本にしか触れられていない問題が出たと。先生は綿密に重要な問題には必ず触れて置かれた名著である。

理乙の生徒への講義は原語のドイツ語、試験もドイツ語で出された。先生は黒板に美しい文字で書かれ綴りを訂正されたことはなかった。これは凡人にできることではない。語学の達人であり数学の天才だった。三年ではヒックスの力学が教科書。英語を読まれること日本語の如く、数式を列ねて説明をされる時、まるで文章を読むように明晰であった。

数学という手段を駆使して宇宙の解明に当たられ、語学の才に恵まれた先生にとっては学問は無上の楽しみであった。数学は正宗の名刀である、切れ味は良いが切り損なうと大変なことになると、反省と言うか使い方についての注意まで与えられた。

講義の合間の挿話は興味深いものだった。先生は実地に行かれない土地でも恰もそこへ行かれたように話される。「父の読書は物理学や天文学ばかりでなく、生物学や地学は勿論あらゆる部門に広がっており、Encyclopaedia Britannicaの第十一版と第十二版とをAからZまで全頁を読破し必要な箇所には註釈や地図まで書き加えていた」と忠敬さんは書いておられる。「数学が一番分かり易い。一番簡単だから。しかし、簡明なるが故に一番発達しているので難しい。本来一番難しい学問は生物学である。」と先生は云われた。次も先生が話された挿話「十八世紀の大数学者が数学の雑誌に問題を出した。空気中を物体が落下する時、到達点に対してどのようなコースを辿るのが時間的に早いかという問題。答えは擺線サイクロイド。ライブニッツは二晩か三晩かかった。ニュートンは一晩で解いた。頭の良さは解決に要した時間に比例する

かというところではない。ライプニッツは政治家、昼間は政治家としてウソをつく生活、真理探究は夜だけ、ニュートンは学問一本槍。従って問題解決に要した時間が両者の頭脳の差を表すものではない。」音楽の話では「楽音ばかりで組み立てられた音楽は冷たい。暖かさを加え対照的に楽音を引き立てるためにワグナーが雑音を加えることを考え出した。ベートーベンは天才、激しい性格に加え独身で過ごしたので、彼の音楽はワイルドである。メンデルスゾーンは家族に囲まれた幸福な生活の中から優しい美しい曲を作った。人間は妻子に囲まれて泣いたり笑ったりして暮らすのが最も良い。」また、「船が進むと、両側に八の字の航跡が残るが、理論的には進路と直角の波が立つ。これを底辺とする二等辺三角形ができるはず。観察をしようとしたが仲々見られなかった。霧島大浪池で水鳥が泳いでいるのを見て初めて確かめられた。」

物理教室の正面の黒板は上下できる。講義の途中で先生はそれを揚げ、裏の部屋に居る助手に声を掛けられ実験道具を持って来させた。

先生の学問に対する態度は悠々たるものであった。当時はアインシュタインの新学説「相対性原理」が大いに問題となり新聞などで報道された。博士が日本へも講演に来るという時であった。「著書である程度は理解出来るが未だ全面的に肯定するに至っていない。画期的新学説はすぐには理解されるものではない、広く理解されるには五十年はかかるのが普通。」というのが先生のご意見。東北帝大の石原純博士だけと云われた時代。

草牟田のお宅にお伺いしたことがある。床柱を背にして座っておられる先生の机に大型の懐中時計が三個置かれてあり「時計は大きくがっしりとしたものがよく小さい腕時計は狂い易い。大きくなるがゼンマイの代りにシリンダーを使ったのが正確だ。」と言われた。計算のためにソロバンが三つ並べて使っておられた。

私は弓道部の責任者として部員の指導に頭を悩ましていた。先生に伺った先生の言葉は「ずっと人生の秘義如何を探求しつづけており、今日までそれ以外のことは考えたことなし。人間は生まれて来たから生きているんですなあ」ということだった。

霊魂のことを先生に質した。「精神は物質より上位にある。」人間は精神と肉体、物質、の両方を持っている。物質世界のことは良く分かるが、精神世界は同等なのでよく分からない。透視や千里眼などと云う話を聞くので試した。学校から帰宅後、正座をして精神統一をすると透視できるようである。アメリカに行っている弟から消息がなく心配していた。相当長い時間精神統一をしていたところ、弟が窓に向かってラケットのようなものを振り廻している姿が見えた。後に分かったのは、その時は学費が足らず窓拭きアルバイトをしていたと。この様なことから精神世界に感応というものが確かにある。人によってそのような能力があるが、誰でもが持っているものではないと云われた。」

「村上家は瀬戸内海の有名な海賊、伊予水軍能島の末裔、その昔大いに威勢を振るった。運動すれば男爵くらい貰えたかも。」と笑って話された。

戦争中お訪ねした。スペイン語を勉強しているが本が手に入らないとのことだったので、帰京後丸善からイバニエスの小説三冊お送りした。半年くらい後に三冊とも読了したと、内容を書いて来られたのには驚嘆した。先生の言葉の勉強法は、原語の辞書や地理書などを眺めているうちに分かるということであった。

トッド夫妻に随って日食観測で北海道へ行った時のことをトッド夫人はその著書に「村上さ

んの頭脳明晰をほめ、その一例として、汽車の線路沿いの柵が焼いた木杭なのを質したところ、“Carbon is not soluble in water”と即座に返事が返って来た」と述べられている。

先生の文明論などは「天文と地象」に書かれている。今を去る五十年前の昔、先生の教えを受けた当時を想起してこの一文を綴った。

(一九八〇・八・二七))

此の記述を送って下さった中柴武雄先輩は2009年3月30日、桜満開の朝、旅立たれたと、たま未亡人さまから知らせを頂いた⁶⁻⁵⁾。

§ 4-2. 浅川勇吉氏（大正九年工科卒）による「村上春太郎先生」

中柴武雄先輩の手紙に東京七高会会報の写しが同封されていた⁶⁻³⁾。昭和52年度東京七高会会報に「村上春太郎教授の思い出」、昭和54年度東京七高会会報に「村上春太郎教授の追憶余聞」を浅川勇吉氏が書いておられる。浅川勇吉氏は大正九年工科卒で浅川研究所所長でしたが昭和61年11月9日逝去されている。まず、「村上春太郎教授の思い出」の記述を抜粋する。

七高で教えを受け今に至っても記憶が鮮やかに残り、学問の深さ、情熱をもって指導された先生としては村上春太郎先生を第一に挙げねばならない。自分の入学は大正六年九月、三年前の桜島大爆発の余燼なお収まらぬ頃。その秋の末、初めて先生の風貌に接した。毎年七高主催の学術講演があり、吹田順助先生と村上先生が講演をされた。吹田先生はヘッペルを中心とした文芸作品の思潮について、村上先生は「月」についてで、資料とそれを基礎づける観測などであった。両先生のご講演を聴いて深い感銘を禁じ得なかつたし、高等学校の生活第一歩を踏み出した自負を内心に持った。

先生の物理学の授業は二年からで、たまたま数学担当の篠原益三教授が長期のご病気だったので解析幾何学も担当された。先生は謹厳の裡にも温情を湛えられ、講義は事象の解説に止まらず、その歴史的背景、創始研究者の努力の姿、人格にまで及び温故知新の眞の実を究める態度に終始せられた。先生はつねに試験勉強は大嫌いだと嘆いておられた。終始独学で通された。高等教員検定試験に合格され教授資格を獲得された、その時に仕方なく試験のために勉強したと笑われた。

七高で教鞭を執られる前に、仙台の東北学院で物理を講ぜられた。島崎藤村が英語を講じていた（東北学院創立七十年記念集）。先生の教授資格獲得直後かと思われる。明治三十三年七高創設に際し迎えられた。化学には東大化学科大学院一年の久保田温郎先生、数学には広島県立第一中学校より篠原益三先生、小野藤太先生（独学で教授資格検定パス）も同時に赴任され、村上先生と同じく独特な高潔なる人格と学殖の豊かさで学生の信望を集められ七高のシンボルとして敬仰されたことは忘れることはできない。

先生は当時日本で第三番目の天体望遠鏡をご自宅の庭に据えられ、観測に献身され月の運行に関する観測研究を続行された。講義中の断片に洩らされたことがあったが、取つき難いものであった。それについて恐らく先生の唯一の著書と思われる「天文と地象」（恒星社出版、昭和二十五年頃）に述べられていたので、その内容を知ることができた。最近の岩波新書「月」では月の運行になお研究の余地があると指摘されている。

振子の等時性についての解説に、その原則発見の経路、理論式の誘導につきわれわれに深い

示唆を与えられた。計時測定に脈拍を使ったこと、定量的法則式を導くには斜面上の運動式を駆使して理論式を導いたこと、この誘導方法は明らかに誤謬であるが、実験物理学と理論物理学の基礎を樹立したことは特筆に値する。先生は現在の理論式との差異は十五%に過ぎないことを示された。正確にはオイレルの楕円関数の展開式なることを付け加えられたことも、未だに脳裏から離れない。

波動に関しては、深い波と浅い波の特質について話された。光学の章では光の速度が有限なることを望遠鏡で確かめたいきさつについての話は感銘を深くした。コペンハーゲンの天文台長レーメル (Ole Roemer) は木星の観測をしていたが、一六九八年の或る晩、木星と衛星との間を光が進行して行くのをキャッチしたのである。これは偶然にも木星の衛星が食にあたった時だった。偶然だが絶えざる努力の賜。自分も毎晩観測しているが、名の知れない鳥が視野に入ってくるだけと言って学生を笑わせた。

最後に付け加えることは、先生は新しい物理学界にも通曉されていたこと。大正九年の学期末に記念として当時喧伝されていたアインシュタインの相対論を希望したところ、快諾され約二時間に亘って講義された。その翌年相対論の第一人者で学士院恩賜賞を授与された石原純博士の講義が東大であったが、それは村上先生のそれと全く同一であった。われわれは相擁して先生に教えを受けた幸いを喜び合った。

「村上春太郎教授の追憶余聞」では、以下の記述がされている。その抜粋を書く。

先生の講義のなかで、自分は家が貧しかったので正規の学問は受けなかった。諸君の一部にあるような試験のための勉強は厭でたまらない。しかし、已むを得ず試験のために勉強したことが二度あったと笑われた。中学卒業と高等教員検定試験のためだったことは云うまでもない。

同志社で新島襄先生に教えを受けられた話の一節に、つぎの一齣があって未だに耳底に残る。新島先生が数学を担当された時、ある学生が問題が解けないので質問をした。即座に先生は自分にも解けない、しかし、君ならば勉強すれば解けるであろうと返事をしたという。村上先生は、新島先生の学問への指導精神の偉大さを感じたことはなかったと述懐された。

三年生のときは、物理の後期と力学とを先生から教えを受けた。力学では新島先生のそれと同巧異曲であった。独特な温故知新と現実に示す学を好む雰囲気醸し出させることは物理のときと同じであった。力学には英国のヒックス著の「力学」を底本に使った。本文の記述については、あまり細説することなく、沢山ある演習問題を逐次学生に指名するのであった。学生たちは黒板の前に出て解答せねばならない。教室は正面の外に側面の壁にも黒板があったので、一度に優に十名位指名される。前もって問題を解いておかねば恥ずかしい思いをすることになる。それには本文も自分で勉強せねばならない。勉強すれば自然に興味も湧いてくるという寸法である。しかし、とかく遊ぶことが先のわれわれのことだったから、その理想通りには行かないことだった。私なんか、この力学の講義が新島先生に心酔された精神の再現であることを体得したのは後年のことであった。

先生が京都で勉強されたことについては、若き日の京都帝国大学の難波正教授との交遊の一節からも知られる。先生の雑話の中で、難波さんと天体観測を共にしたことがしばしば出てくる。難波さんが母に天体望遠鏡で月を見せたところ、月は風流なものとしか思っていなかった

母はヒドイ痘痕顔を見て驚き、それからは歌が詠めなくなったと愚痴を零されて困ったという話を聞かされたと言う。

先生が片言隻句の内に洩らされたお話の裡に、物理学に疑問があった時は山川健次郎先生、数学では菊池大麓先生に手紙で教を乞うたとのこと。先生は七高開設直前まで東北学院で物理を講じておられた。同じ年に島崎藤村が英文学を担当していた。自分が七高を出て東大工学部機械工学科に入って間もなく友人になった八高出の大柴文雄（米沢高工、工学院教授、工博）君から、藤村の中編小説「理学士」²⁰⁾は大変面白いと薦められたが、読もうと思いつながらそのままに今日に至っている。藤村の小説は、モデル当人について真実を伝えていると聞くので、村上先生の若い姿を藤村がどのように見たかを知りたく思う。

最後に、仙台の東北学院と七高との間に、奇妙とも不思議ともいふべき縁のあることに驚かされる。それは、七高開設以来数学担当で在任中に逝去された小野藤太先生にあざなえる関係である。小野先生は熱烈なる指導精神を内に蔵し外には研究に挺せられ内外に篤き信望を寄せられたと聞かすが、自分たちが入学する一年前に病魔に襲われ不惑の齢を迎えることなく惜まれて物故された。その先生にまつわる一佳話である。先生は村上先生と同じく独学にて高等教員資格を得られ七高に迎えられた。若い時代には奇しくも仙台で勉強された。自分は先輩から先生の高潔なるご人格と独特なる指導精神を誇らしげに追想するのを聞いた話の一節に、先生は苦学して勉強された時代には中学で習字の先生をしていた。そのとき乞われるがままに東北学院礼拝堂の塔に「天主堂」と書いたことがある、という一齣があった。自分は大学を出て東北大学金属材料研究所に奉職することになった。先ず小野先生の文字を拝見することが念願であった。東北学院は繁華街となった東二番丁にあった。礼拝堂の塔には石に彫刻された天主堂の文字は立派に眺められた。雄渾というか独特な風格ある文字に接し、ほのかにそのかみを偲ぶのであった。隣接された赤煉瓦の古い建物を見て、曾てそこにはわが村上先生が物理を講じたなどとは夢にも知る由もなかった。いま、仙台に降り立ってそぞろに思い出すと、われわれ七高生に取りては誠に感慨深い建物も戦災に禍されて灰燼に帰して、語り継ぐべきよすがの空しく消えて、冷かなコンクリートのブロックが風情なく立ち並んでいるばかりである。

（浅川研究所長）

§ 4-3. 伊東辰雄氏（昭和11年理甲卒）による「村上春太郎先生」（開校百年記念誌⁷⁻³⁾）

開校百年記念誌の頁62-63に「七高にまつわる思い出」の項に「先生方の思い出」という題で、伊東辰雄氏は、

……当時七高教授中で少なくとも久保田先生と村上先生は勅任官ではないかと私は思っていた。村上先生は温厚でやさしい感じであった。……

と記述しておられる。

§ 4-4. 金久正弘氏（昭和12年理甲卒）による「村上春太郎先生」（開校百年記念誌⁷⁻³⁾）

上記の伊東先輩に続いて頁82-83に「七高の思い出」と題して金久正弘氏は

……化学の先生にはかの有名な久保田温郎先生もおられたが、……私には怖さが先立って何だか近寄り難い先生であったことは確かである。それとは対照的に私をふんわりと包んでく

れたのが物理の村上春太郎先生の講義であった。先生の書かれた物理の教科書は、当時受験参考書としてもはやされた竹内潔氏の「物理学上・下」などと比べると、決して大学受験向きではなかったが、「物理すること」の楽しみを教えてくれる本であった。……

と書いておられる。

§4-5. 樋渡正五氏（昭和12年理乙卒）による「村上春太郎先生」（開校百年記念誌⁷⁻³⁾

続いて頁88-92に「七高造士館の思い出」という題で、樋渡正五氏は

……私は天文学会に入れて貰い、物理学の村上春太郎教授の指導を受けた。教授は小柄で物静かな方で何時も飄々としておられ、余り多くは喋られなかったが、屈折望遠鏡の入ったドームの中では楽しそうに何時もニコニコしておられて、私達の愚かな質問にも実に懇切丁寧に答えて下さった。今私の机上には七高の金のZをはめ込んだ銀製の、土星を取った小さなバッジが天文学会員章としてあり、それを見て当時を懐かしんでいる。当時の私は村上教授の影響で星に興味を持ち、野尻抱影氏の「星座巡礼」「星座めぐり」「星座神話」「天文隨筆・星を語る」「星座風詠」「星座春秋」を買込んで一心不乱に読み耽った。……昴すばらの哀れな七人の娘達のロマンスを先生の口から聞こうとは夢にも思わなかったしそれも今では美しい想出となった。……私は色々と新しい知識を先生から教わった。……多数の星が夫々独自の色の光で瞬き乍ら輝いているのを見ると暫くは人間世界の事を忘れさせる。こうして教授から星に関する実に多くを教わった。あの物理学の講義とは別の先生を見た様な気がしたものである。七高時代には南十字星を見る機会に恵まれなかったが、後年東大を出て海軍軍医となり、敗戦後復員輸送艦占守の軍医長となり、トラック島に赴いた時、遙かに遠く南十字星を仰いで、七高時代の村上教授の事を偲んだものである。……

と記述しておられる。

§4-6. 日高孝次氏（大正12年理甲卒）による「村上春太郎先生」（東京七高会報⁹⁻¹⁾

東京七高会報昭和59年度会報の頁10-13に「海洋物理と私」と題して記述がある。

……二年ほど前、東京大学海洋研究所の庭でころんだことがあった。なかなか上手にころぶことには馴れているが、起き上がることができない。そのうち誰か来るのであろうと考えた。ちょうど目の上に冬の太陽がよく見える。太陽の中の模様を眺めているうちに、終生忘れ得ぬ思い出がよみがえってきた。ほかの本にも書いたことであるが、物理の好きな私が、七高の理科に進んだ一年生の時のことである。村上春太郎先生が、校庭で一三五ミリメートルの赤道儀で太陽観測をされ、生徒たちにも覗かせてくれると聞き、十数名の者が列をなした。快晴下の太陽が、径五インチくらいの球に見えたのである。その赤道儀は、当時先生がオットウエイ社に注文してつくらせたもので、性能の優れたものと聞いた。

三年になって、私たちは物理学の講義を村上先生から聴くことになった。物理学全般に大変造詣の深い方であったが、やはり天文学に関係したことになるといっそう熱がこもられた。私はすっかり天文学と先生の人柄に魅了され、たまらなくなつて先生のお宅へ伺った。将来自分は天文学に進みたいこと、そのうち望遠鏡を手にしたことだけを告げて、一人大いに満足して辞去した。幾日か考えた末、また決心していろいろな望遠鏡の値段だけをおたずねしに

伺った。しばらくして、先生は、「他の目的で二インチ半のオットウエイ製を持っているから、一二〇円ほどならゆずってもよい」といわれる。「しめた」と思った。上級生の資産家の息子星野君が、三インチ半の望遠鏡を三五〇円で買ったと聞いていたからである。私は資金調達のため父からの送金分から半年ほど昼飯を抜いて六〇円を貯め、父にそのことと、あとの半分を戴きたいと書き送り、三年生の冬に先生のお宅へ伺ったのである。ニコリともしない先生が、「昼飯くらい食うんですナ」といわれ、大きな木箱を渡してくださった。実に嬉しかった。その先生の、天文学をやりたいなら物理学をやるようにという助言で、私は急に勉強をはじめ、高校はたしか二番で卒業できた。

……東大に馴れた頃から、週二回アテネフランセでフランス語を学んだ。後にフランス語で論文作成ができたのも、村上先生のお蔭であったかもしれない。……

さて、天文学に進みたいと思っていた私であったが、神戸の海洋気象台へ就職し、下から天を眺めるのではなく、毎日丘の上から下の海を眺め、観測船乗りになってしまったのである。決して気の進む就職先ではなかったが、当時の台長岡田武松先生の刺激で、研究ということを選び海を眺め、海によって教えられ、数々の論文作成の生活に入っていった。……

村上忠敬先生が「村上春太郎伝」に書かれている日高孝次さんが草牟田の家に春太郎先生を訪ねて来る話の真相である。

§4-7. 清原邦武氏（昭和8年理甲卒）による「村上春太郎先生」（東京七高会会報⁹⁻²）

東京七高会会報平成元年度会報の頁28-29に「天文台の再建を・せて記念碑でも」と題して記述がある。

……母校のあの石の橋にさしかかるとき、あおぎ見た石垣の上の小さな天文台の二つのドームは、七高の象徴のひとつだったといってもいいでしょうし、城山のふかいみどりを背に、四百年の歴史を秘めた堀にのぞんで立つ白いドームは、四季の変化につれ、ちょっと風変りな風物詩であって、なつかしい思い出になっています。

この天文台は、小さいとはいえ本格的な赤道儀として、つくられたもので、レンズの直径は忘れましたが、たしか日本で十なん番目かにかできた天文台として認められていると聞きました。

ぼくは東寮でしたから、近いこともあって、ときどきのぞかせてもらいました。太陽の黒点、月面のクレータが大きくあざやかに見えたこと、平たい輪をまわって静かに天空に浮いているかのような土星、みかづき形の金星がキラキラと生きているかのように、かがやききらめいていたことなど、宇宙のふしぎに感動したものです。……

この天文台が実現するまでには、物理学担当の村上春太郎先生が大へん苦しんされたようです。文部省の予算がポンとついたわけではなかったと聞きました。

中央から遠くはなれて、天体観測を経験することもできない教え子たちのために、また地域の文化的啓蒙のためにもと、村上先生は情熱を傾けられたようです。その結果、七高を中心として、鹿児島には天文宇宙科学だけでなく、ひろく科学的な風土が少しずつ芽ばえたのではないのでしょうか。

直接、天文学を志した人もかなりあったようですが、ぼくが知っているのは、ぼくと同じ弓道部員であった、つぎの二人の方です。

昭和三年卒の故村上忠敬先輩（広島大名譽教授、金城女子大教授）と昭和十一年卒の故江本裕治君（岐阜大教授）がそうです。江本君は天才的な天文学者といわれていましたが、若くしてなくなりました。ほんとに惜しい人だったと思います。

小さな天文台がいくたりもの専門の俊才をはぐくみ、そのほかの分野でも多くの人々に大自然の美しさ、偉大さを見せてくれ、大きな貢献をしたわけです。

できれば、鹿児島県民のために、天文台を再建してはどうでしょう。……せめて、記念碑でも建ててはと思うのです。……来年の九〇年記念にひとつ、いかがでしょう。

§ 4-8. 牧常彦氏（大正12年理甲卒）による「村上春太郎先生」（東京七高会会報⁹⁻³）

東京七高会会報平成5年度会報の頁1-4に「回想三題」と題して3人の先生、岡部圭造教授（英語）、村上春太郎教授（物理）、石倉小三郎教授についての回想記述がある。その内の村上先生についての文を記載する。

村上教授は有名な天文学者で、英国王立天文学会員として、余りにも有名であった。校内では識らぬ者も無いのは勿論。私が教授を今日に至るも尊敬するのは、その様な事では全くない。教授は非常な音楽学者であるという事である。今日此処東京においても非常な「オペラブーム」で、その内容も日本人には上演不可能とされた、ワグナーの楽劇物迄上演されるようになり、ウイーンの劇団の引越公演がある。今日東京において、公演の切符を手に入れるには、毎回電話申し込みで数時間を予約に必要とする位である。……その昔、今から数えて七〇年前にワグナー物のメッカ「バイロイト」の楽劇場の「オーケストラ・ピット」の構造とその演奏を教授から教えられた。この劇場は当時若きルードビッヒ二世による援助で建てられたものである。バイロイトで、ワグナー独自の構想から作られた舞台の下に潜った「ピット」を、あの当時教授がどうして識っておられたか？。私はそれをお尋ねするのを忘れる程、興奮しておった。教授はそのピットから流れるオーケストラの音のハーモニーが、会場に如何様にして響き渉るかと言う事を、耳に聴く事が出来るかと言う事、「オーケストラ」の音の「ハーモニー」を説明された。私は唖然として先生の話を一否講義を聴き入った。当時ワグナー物としては、精々ローエングリンの「夕星の歌」位であった。北欧の物語は、余り興味のあるものではなかったが、音のハーモニーの話は、私には眩暈いする様な興味があつた。

その後大学に入って、古本屋で、京大の物理学者村岡教授の「音響学」の本を手にした。これによって、村上教授のお話を更に深めた。先生がバイロイトの事を、ドイツの田舎の劇場の事をどうしてご存知か。今日でも夏期に公演されるバイロイト劇場のお話を、お尋ねするのを忘れて、唖然として聞くのみであった事を思い返すのみである。音楽の色々のお話の中でも、「ストラディバリュー」や「ガルネリユース」等ヴァイオリン楽器の変遷の話、名器の流転の話も聴かされた。これ等楽器の話もその後英書で読む事が出来た。何はともあれ、教授が、あの当時音楽学の知識を多く持っておられた事は、レコード吹きこみも未だ未熟の時代、勿論結婚前で、ワグナーのローエングリンの結婚行進曲等、思いもよらぬ遠い時代である。この教授から「音楽」の講話を享けたのは、私のみではなかったか。どうしてバイロイトをご存知であったか、お尋ねする事を逸した。そのワグナー楽劇の公演が数年前にこの東京で開かれた。……開演に先立って、会場の大ホールに四人の楽人によって、「ファンファーレ」が高らかに鳴り響いた時、

……

幾十年の待ちに待った恋人にでも逢う様な感激に溢れる気持ちに浸った。そして村上教授に教えられた七十年昔の思い出が目蓋に浮かんだ。これが日本におけるワグナー楽劇の第一声であった。教授が、私に教えて下さったその物が、眼を輝かせ乍ら話を聴かして頂いた、その昔が思い出された。……

§ 4-9. 牧常彦氏（大正12年理甲卒）による「村上春太郎先生」（東京七高会会報⁹⁻³）

東京七高会会報平成6年度会報の頁1—5に「思い出は盡きず」と題して書いておられる。

最近、東京新宿の学生街で、変わったゲームが行われたのをテレビで識った。詳細は解らないが、最近のシャーロキアンブームの流れのグループの一環である。知り合いのW大の学生に聴くと、学生達の鞆の中にも、「コナンドイル」の作品の冊子が見られると云う。……

東京を中心として、全国に演劇場の増加、演奏団体の増加、拡充及び演奏家の増加は目まぐるしいが、前号に村上教授とザルツブルグの独乙オペラの事を記し手が、その時教授が「カストラート」なるオペラ歌手の存在、これが大臣にまで登った話を聞かされたのを思い起こした。勿論、その様な話は忘れるともなく耳底から去っておった。それは、七十余年の昔の話である。

今日では、カストラートなる去勢された男性声楽家は勿論存在せず、「カウンターテナー」と云う高声音の男性歌手が跡を嗣いでいる。曾てのカストラートは、十七・八世紀の社交界の寵児で、その最も有名なのは、スペインの大王フィリップ五世に仕え、絶大な寵愛を享け、遂に大臣の位にまで到達したと云う、異例の昇進とされた。私はこの逸話を当時村上教授のお話で「大臣に迄昇進した……」と云う事を、私の耳底の記憶として残っており、この奇声にも近い男性歌手の存在を、その時は哑然として聴き、想像した。この種の歌声は、イタリアでは「白い声」と云われ、この奇声を、今更哑然として教授の話を聞いた思い出がある。当時、南ヨーロッパでは、可愛らしい男の子が生まれると、成長を待たず去勢されると云う風習があった。もし、カストラートとして成長した時には、唯に歌手としてのみでなく、英雄として尊敬されたと云う「お伽話」の様な話が伝えられている。……カストラートは、元来は東洋の宗教祭祀に起源をもち、十六世紀頃のカトリック教会の合唱曲の歌手に用いられ、十七・八世紀イタリアオペラ全盛時代には、多数のカストラートの曲があり、モーツアルトの時代まで歌い継がれた。その声はC位迄の高音を発声したと云われ、「恐竜」にも比すべき存在と云われる、最後のカストラートは、システン礼拝堂聖歌隊員として、今世紀まで生存し、アルツァンドロ・モレスキ（一八五八—一九二二）が一九〇二年頃に録音したLPが残されているそうである。……

今日、未知の——否消え去った様な話を、教授はご承知であったのか、……かたる男性歌声の存在を、村上教授が先刻ご存知であったと云うことを再記して終わりたい。……

§ 4-10. 城井睦夫氏（昭和17年文甲卒）による「村上春太郎先生」（東京七高会会報⁹⁻⁴）

東京七高会会報平成19年度会報の頁1-5に「七高初期の先生がた」と題して書いておられる。

十四、五年前、千鳥淵の近くにある国立公文書館に行ったおり、たまたま、明治三十五年三月二十八日付の官報号外に「朕文部直轄諸学校職員定員令裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」という

御名御璽つきの三月二十七日付の勅令第九十九号の「定員令」が出ているのを目にした。わが第七高等学校造士館の欄には、校長（※注 館長）一人、教授十三人、助教授五人、書記五人と出ていた。貴重なものだと思ったのでおねがいして複写してもらったが、明治三十五年当時の文部省直轄学校のこともご承知ねがえるのではないかと存じ、掲げさせていただいた。

以下「北辰斜にさすところ—第七高等学校造士館50年史—」⁷⁻¹⁾より引用しておられる。すでに記述した内容なので省略する。

§ 5. 七高天文部の学生だった者からみた「村上春太郎先生」

我々の学年に物理を教えられたのは、初めは浅野徹先生で直ぐに大阪大学から若くて赴任された浦野芳先生に替わられた。浦野芳先生は五高の出身。物理の先生には下瀬育郎先生もおられたが、何方からも村上春太郎先生存在を知らされることはなかった。

我々在学中、村上先生とは直接の接触は無かったが、天文部の我々には先輩から村上忠敬先生の全天星図を購入すること、日本の近代天文学の開拓者の村上春太郎先生が居られたこと、天体の運行に関する現象がある時、それを観測し現象が起る時刻などを測定するよう指示されたことがあったというのが我々同僚の記憶を総合した答えである。そして、このような事を話された先輩は多分守永さん²¹⁾だと思われる。

私達が使用した全天星図（昭和16年3月18日刊行、恒星社）を当時使用されている文字で書くと「全天星圖 定價三圓八十錢 著者 村上忠敬 發行者 土井客郎 印刷者 谷口熊之助 發兌 恒星社 發賣 厚生閣 福井が購入した全天星図に昭和十六年五月一日と墨書しているから入学後早くに先輩との接触があり購入すべしとの勧めがあったようである。（福井による説明：發兌ハツダの兌は交換する意 [—兌換—兌換紙幣]、から転じて売る意、で書物などを印刷して売り出す、發行、發売のこと）

火星が月に隠れる現象（月による隠蔽）が起る日時は丸善の理科年表で判っていた。先輩から伝えられたのは、火星が月に接触し月の裏へ隠れる時刻と月から出てくる時刻とを計算されているので、それらの予測を検証するため、それぞれの時刻を測定することであった。天文部の誰かが先生からの指示だとして我々に伝えられたのであった。当時の小生はその先生が村上春太郎先生だとは知らなかったが「退官された偉い先生だ」とは聞かされていた。

火星が月の後を通る、月による隠蔽、を観測した實際を記す。先ず望遠鏡で火星を視野に入れる。火星が月に接近して行くのを追尾する視野では、火星は想像以上に速い速度で月に接近して来る。月面は満月だから非常に明るく眩しい。火星が月に接触した時、「今だ」と叫んだので誰かがクロノメーターで時刻を記録した。月に隠れた時刻も記録されたが、難題は火星が月面の何処から出て来るかという場所が判っていない。およその見当をつけて望遠鏡の向きと視野を決めて月面の縁を眺めて出て来るのを待っていると、あっという間に火星が現れ月縁から離れてしまっていた。だから火星が月から出た時刻は測定できなかった。

この記録が先生に報告されたかどうかは不明である。

今、この稿を終えるに際し残念に思うことは、七高生となった直後の昭和十六年や翌十七年では天文館の錦江堂書店にて先生の著書「物理学原論」が購入できたのではないかということである。「物理学原論」については別稿にて詳しく説明をする。

§ 6. フランス天文学協会へ報告された桜島大噴火の状況

村上先生は1896年(明治29年)にフランス天文学協会(La Société Astronomique de France)に入会されている。この協会は天文学、気象学、地球物理学の3分野を含めた月刊誌を刊行している。村上先生は大正3年(1914年)1月の桜島大噴火を記録し状況を逐次フランス文にて報告されていた。協会のルノドー G.RENAUDOT 氏はそれらを要約した記事を協会誌に掲載した。その記事内の大噴火に直接関係する部分を抄訳する。先生と協会誌との関係については註22に記述した。この作業のため、大阪大学の友人、ルカ・バイオッティ Luca BAIOTTI 氏²³⁾に原仏文を英文に翻訳してもらった。

邦訳文

6ヶ月前から桜島付近ではほぼ連日微小な地震が起っていたが、桜島火山が長く続いている平静さと不活発さが終わるだろうという予測はできなかった。その地域の住民も1914年1月11日までには心配すらしていなかった。ところが、11日午前4時前、強い地震が起った。この地震が大噴火大災害の前触れだった。(フランスの時刻では1月10日午後9時にこの地震が起ることになる。)その後、24時間以上も大地は揺れ続けた。村上氏の表現では「大地は逆波が立っている海に浮かんでいる小舟に乗っているようだ」とある。12日午前10時、突然、大地を揺るがす大音響が轟いた。そして、壮大で巨大な噴煙が、静かだった桜島上空の青空にむくむくと上昇し約29分程すると6kmの高度迄達していた。轟音は絶え間なく轟き、山の斜面には岩や灼熱の溶岩が噴出していた。それは、時には壮大で、時には恐ろしい光景だった。恐怖に襲われた鹿児島市民は避難を始めた。桜島からの轟音は休み無くそして段々と大きくなってきた。午後6時27分、山が引き裂かれるような大炸裂音が轟いた。実際に頂上から深い裂け目が始まり北面から南面にまで現れた。この光景は、最も勇気があると自負する者ですら逃げてしまう程の、恐ろしいものだった。鹿児島市内には人一人居なくなった。人々は、この自然の劇が行われている劇場から晴れ着を着て走って逃げて行く、奇観であり、悲壮であり、眞迫の光景で、火星と土星が輝いている横の月が放つ光のもとでの清新で静寂な夜の、災害と時を司る神が啓示した数時間の間に起った恐ろしい出来事を象徴する光景だった。

翌日の13日には火口は静かになり始め、山腹の光景も見えてきた。海岸にまで流れ下る2本の溶岩流が見えた。鍋山旧火口近くの東側に巨大な新火口が出来ていた。段々と火山活動は収まって行き1週後には鹿児島は元の状態に戻り、市内は以前のように活気づいてきた。しかし、美しかった桜島は墓場のようになってしまうていた。海は点在する多数の軽石で覆われ、水温は27度にまで上昇していた。火山灰は桜島の海岸付近では59cmも積もっていた。又遙か東京を越える1200km以上の遠くまで飛んで行っていた。桜島の空は火山灰で太陽がはっきりと見えない状態だった。

大噴火による人的そして建造物等の被害は未確認である。

以上

この報告文に掲載された噴煙の写真と先生のスケッチを示す。



(1)南州墓地（上竜尾町）にて撮影された桜島大噴火の噴煙
南州墓地は国鉄JR鹿児島駅と七高との略中間の西側の丘、登り坂を数百メートル程行くと正面に西郷隆盛、右手に築原國幹、左手に桐野利秋などの大きな墓が並び、墓地全体では七四九基の墓石、二千二十三名もの人々が眠っている。西南戦争の二年後、生き残った人々が市内外に埋葬されていた遺骨をこの墓地へ移した。さらに六年後、宮崎熊本大分にあった千八百名余りの遺骨もここへ移した。



(2)村上先生がスケッチした大噴火から20分後の噴煙

§ 7 先生の著書と論文

先生は天文学への啓蒙書二冊と旧制高等学校の物理学教科書一冊と研究された流体力学関連と月の運行についての英文の論文が公表されている。ここではそれらの概略を説明し、独立項にてそれぞれを詳しく紹介する。これらの図書は国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されている。

§ 7-1-1. 天文学一夕話

この本は国立国会図書館近代デジタルライブラリーにて公開されている。(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/831057)



発行 明治三十五年十月十日 発行人 島津源蔵 定価金七拾五銭
133p

村上春太郎先生は明治二十三年に同志社理科学校に入学し、ユンケル教授の指導で天文学へ進まれた。その後の十数年の間に修得された天文学を、先生の学習体験から精密であり幽玄であり詩情豊かな星界、其の星空を観る楽しさを世の人に伝えるべく平易に説明をしたと書いておられる。しかし、この本が発行された明治三十五年当時の文体で、今では余り使われない漢語表現が次々と出てきて先生の博識を示している。内容も高い水準なので平易ではない。

巻頭第1ページにドイツ語で Emil JUNKER 教授に感謝の言葉を書いておられる。

先生が修得された知識は、ギリシャ以前から現代に至る洋の東西に於ける天文学と物理学とが両々相俟ってそれぞれの知識が進展して来た、その進展に寄与した先人達の行為まで詳細に考究された。実際に太陽、月、遊星や恒星を自らも観測された。

第一章の総論にて星空の銀河を月や遊星が移動している様を柿本人麿の歌で示され、天空の隅々迄重力が作用していることを、中国の詩経に書かれた成句を孟子の高弟、万章が孟子に問いかけ孟子が答えた万章成句の中の文言を少しもじって、書いておられる。普天之下 率土之濱を銀河の濱とされた。

星はそれぞれ万有引力の下で動いて入るが、紀元前2世紀、ロードス島で生まれたギリシャの天文学者で春分秋分の歳差運動を発見したヒパルク HIPPARCHUS をしてその墓頭に呼び戻して星の位置を見せれば彼の時代と変ってはいないと認めるだろう。

太古の人間が文明の萌を手にするのは星の運行を精確に観測記録して時間の概念を得たことから始まる。支那インドでその端緒が生まれたが、人々の交流が無かったから知識はそれぞれの国内に留まっていた。然し、カルデアの星学はエジプトを経てヨーロッパに伝わり燦然として今日の星学に発展した。

カルデア CHALDEA はメソポタミア南部に侵入し定着したアラム系遊牧民の一派で前7世紀にバビロンを首都としてカルデア王国を樹立した。メソポタミア MESOPOTAMIA はイラク IRAQ の古代名、チグリス Tigris ユーフラテス Euphrates 両河が流れる地域のギリシャ名で、ここで世界最古の文明の一つが興った 北部はアッシリア、南部はバビロニアと呼ばれた。

第二章、第三章は望遠鏡、第四章は月、多数のクレーターの原因を火山としておられるが今日では火山は少数で殆どが月の形作られるときの隕石の衝突と考えられている。第五章は太陽、エネルギーの源など今後の知識の進展に負うが、先生の観測を基礎に置いて、紅炎（プロミネンスという表現はまだ無かった）の大きさ、コロナ、現在黒点と称している太陽表面に現れる斑点などが説明されている。第六章は遊星、地球の運動を詳細に述べ、火星表面の観測から水の有無、生物の存在を議論し、木星、土星、彗星、流星、隕石を説明。第七章は星辰界、太陽系の外の話、現在は星座と言っているが此の時代では宿と言っていた 星、恒星の光度の等級、肉眼でも観ることができる大星霧（nebula 星雲）、変光星等を説明 第八章は星霧、新星 星霧について当時は種々の説が考えられていた、突如天空に現れ明るく輝いた新星が段々と光輝が薄れて、遂に並の星と同じになるその星の消長について、幾つかの國で歴史書と言われる書き物に記録されている 第九章は結論 先生が天文学に就いて考えている答えである 先生の考えを代弁するヴィクトール・ユーゴの詩にて結論とされた その詩の大意は

地球と太陽は人間と天使、泥と光彩 星は太陽、天上の樂園 清純な星を忌まわしい星が取り
囲んでいる

§ 7-1-2. 天文と地象

初版は昭和19年、戦後昭和24年表現と文字等を改変し再版された。この本は二つとも国立国会図

書館近代デジタルライブラリーにて公開されている。

(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1063789>, <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1154552>)



30項目に別れているが、項目毎に関連する人物の行動に就いて語られていて人物と天文との関係が先生の博識を以て歴史的、科学史的に示されている。全体に底流しているのは先生の天文学論であり人生論である。古代中国、中東、アラビア等の歴史を背景にした天文学の発展が語られている。

現在の学問的水準から見て先生の持論には少し行き過ぎと思われる部分がある。

§ 7-2. 物理学教科書：物理学原論 昭和3年出版

この本は国立国会図書館近代デジタルライブラリーにて公開されている。(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1146230>)



浅川勇吉先輩（昭和年月日逝去）が「七高で教えを受け今に至っても記憶が鮮やかに残り、学問の深さ、情熱をもって指導された先生として村上春太郎先生を第一に挙げねばならない……講義は事象の解説に止まらず、その歴史的背景、創始研究者の努力の姿、人格にまで及び温故知新の真の実を究める態度に終始せられた……」と書いておられる。(§ 5-2. 浅川勇吉氏による「村上春太郎先生」)

本書では浅川氏の記述通り、説明すべき新しい項目の内容を、それを考究した人物がどのような思考の背景の元に得た知識かを、実際の人物名を挙げて記述されている。講義の際には人物に就いて詳しく話されながら物理の項目を説明されたと思われる。

本書全体で取り挙げられた人物は375名である。それらの人物の行動を辿ると科学史に於ける物理学の進展への寄与が読み取れる。

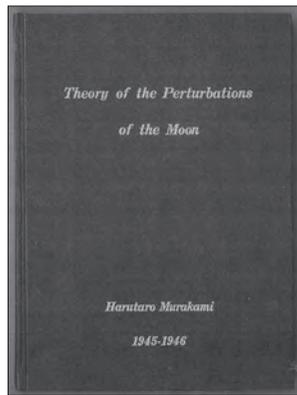
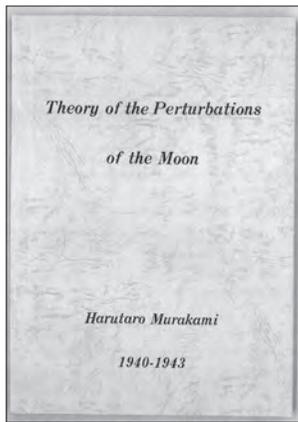
別稿の“物理学原論”の解説を是非一読してほしい。

出版が昭和3年だから量子論、量子力学が胎動の時期ゆえ講義の対象になっていない。しかし、アインシュタインの特殊相対性理論、一般相対性理論については講義の対象とされた。

§ 7-3. Theory of Perturbations of the Moon. 1940-1943, 1945-1946

月の摂動論

村上忠敬先生が著書『秋津供養』に書いておられる「村上春太郎伝」に“太陰運行論の研究は第一期の十年間の終わりに一通り完成、清書されたノートは、不幸にも昭和二十年六月十七日の戦災にて焼失した。然し、父は屈することなく再び想を煉り草稿などを参照して書き直して学会に発表の機会



を待っていた。この論文「Theory of Perturbations of the Moon」はその儘になっている中の父は世を去った。”と記載されている。

広島大学の名誉教授になっておられた忠敬先生は、月の運行に興味を持ち研究している若老研究者に配布すべく春太郎先生の原稿を数十部印刷した。自らを編集者 Editor とされている。編集者の謝辞を書いておられる。昭和57年（1982年）6月10日

初めの本は春太郎先生の自筆であり、149ページ 最終ページの下部に

Finis (1944 XII 9)

と記されている。

二つ目の本は、春太郎先生の原稿をそのまま忠敬先生が手書きで書き写された。春太郎先生が記述をされた日付けは原稿に記入されている。始まりは(1939 XII 15)と記入されている。

忠敬先生の手で(1945, XI 16)より書写を開始したと記入されている。

307ページで、春太郎先生が書き終えられた日が(1943 V 9)で忠敬先生が書写を終えられた日が(1946 III 2)と記入されている。

§ 7-4. On the hydrodynamic group-wave and the flux of the wave-energy, 1924

流体力学集団波と波動エネルギーの流れに就いて

此の論文は私費を投じて I.Irie により印刷され、内外の然るべき研究者の郵送された。

§ 2. にて記述した岡本正志氏がバーミンガム大学で見出したロッジ卿への手紙の送り主の村上先生が批評を依頼した論文が、此の表題の論文である。現在はこの論文の全ページは所在が不明で、論文の § 13. からの続編 Sequel が存在している。国立国会図書館では続編の全ページをフォトコピーをして電子版にして公開している。

まとめ

一代記とも云える村上春太郎先生の偉大な姿が記述できた。先生が名利に恬淡で〔「村上春太郎伝」、§ 3-2〕、専ら天文学の研究と物理学を教授する教育者に徹して第七高等学校造士館から離れる意志を持っておられなかったことは七高生として大いに感謝すべきである。岡本正志教授との接触後に引き続いて村上先生についてこのようなまとめの作業をしておれば、幾人かの方はご存命だったので先生についての確かなご記憶やさらなる資料を頂くことができ、一段と詳細な先生の姿を記述できたのではないかと残念に思っている。

先生の教えを受けた者達がそろって憶い出す先生の姿は、学生をふんわりと包み温厚でやさしく、また飄々としていつもニコニコされていたとある。講義の合間の小話、之は講義を聴く学生達にとっては鮮やかな印象として残るもので、この小話と共に学問の深さを情熱を持って教えられ学

生の質問にも懇切丁寧に応じられたと先輩達は口を揃えて述べている。しかし、このように学生達に接せられる先生とご家族が述べておられる家庭内の先生の姿は温和と冷徹の二面が現れていて興味深い。

先生は物理学、化学と数学の高等教員資格を独学で修め検定試験に合格されている。英独仏伊語にスペイン語も自習で修得されている。ブリタニカ百科事典の全巻を通読されAからZまでの全項目を覚えておられたという。昭和初期までの旧制高校では教科書は原書を使っていた。先生がドイツ語で授業される時、黒板に書かれる文字は書き違えをされることなく美しかったという。

欧米の学術情報をどのように入手されておられたかは不明だが1896年にベルリンとフランスの天文学会会員になられていたから、学会からの通信で欧州の学術情報を手にしておられたのだろう。

桜島噴火の状況報告を仏文でフランス学会へ逐次送られていた。(この件に就いては別項にて説明する。) 英国皇太子が噴火後の桜島を皇太子だった昭和天皇が随伴して視察される際、先生が解説と通訳をされている。またドイツ東洋艦隊艦長とも親しく毎年艦隊が鹿児島へ来た時に会われている。大正から昭和の初期に来日の外国人と親しく交流された個人としての日本人は外交関係の人達を除けば大変珍しい存在だと思われる。

ロッジ卿へ信書を送られているから、英国の学術誌 Philosophical Magazine か Proceedings of Royal Society London を手にしておられたのかも知れぬ。いずれにしても欧州の物理学会や天文学会からの情報を受けるアンテナを持っておられたと思える。日本国内では無名の高等学校教授だが月のクレーターに名前が付けられているように欧州の学界では著名な人物だった。

アインシュタインの相対論を学生の要請で学期末の記念講義に2時間にわたって明快な解説をされたのは、先生が逸速くその論文を手にとられ解読されていた証拠で先生の素晴らしい能力だと感服する。

この小生の一文で一般世間から隠れた途方もなく型破りの物理学の教授、村上春太郎先生を世に現すことができた。旧制高校にはどの高校でも、村上先生と同じく学問の深さを教えると共に高潔な人格で学生を導かれ、篤い信望を得られていた先生方が多く居られた。我々の時代にも学問を教え人格を育む教育の旧制高校の伝統は引き継がれていた。

先生は物理学から離れた音楽の分野でも精通されておられたことが、牧常彦氏の記述で示されている。先生は超人的な多方面にわたる該博な知識を持っておられた。

自宅通学生で我々と同期の理乙の川畑平一郎氏から春太郎先生が隣人達から一目置かれていた話の手紙を貰った²³⁾。それは“草牟田町の近所の人達は、先生が傘を持って出られるかどうかで晴雨の判断ができて測候所の天気予報より当てになったという”。先生は星の観測の為、天候の変化を常に観望されておられたから、風の吹き具合や雲の動きなどから天候の変化を予想できる経験法則を持っておられたと思われる。

川畑氏の手紙には春太郎先生のご長男清明さんに論文の英訳についての指導を受けるのに寒い夜、自転車草牟田のお宅へ幾度か通ったと書かれていた。それは昭和31年2月か3月だった。清明さんは多分当時は鹿児島県立短大の英語の教授で、後に鹿児島大工学部教授になっておられる。この話は清明さんについての数少ない情報の貴重な一つである。

村上春太郎 年譜

本稿の記述及び §4.1 忠敬先生著の「村上春太郎伝」、§4.2 處直氏による「祖父・村上春太郎のこと」と §4.3 ご親族による「祖父・村上春太郎のこと」の記述と忠敬先生の「秋津供養」の記述から作成した。更に村上處直氏に校正を依頼した。

明治5年 (1872) 1月2日	出生 愛媛県越智 (オチ) 郡東伯方 (ハカタ) 村大字有津 (アロウズ) (現在は今治市伯方町) の庄屋、村上重吉の長男
明治16年 (1883)	今治中学校入学 今治中学校が廃止される 松山中学校第八学級に転ず
明治19年 (1886)	松山中学校が廃校となる
明治20年 (1887) (16才)	島の若い衆と共に船で上洛 同志社本科2年2期に編入される 新島襄の感化を受ける
明治22年 (1889)	病を得て帰郷
明治23年 (1890) (19才)	再上洛 同志社理科学校入学 Emil JUNKER (ユンケル) の指導で天文学へ向かう レルネデ氏デントン嬢と親しくなる
明治25年 (1892) 4月～6月	同志社女学校で化学を講じる
明治26年 (1893) 4月	仙台の東北学院長シュネーダー氏の招聘にて、同学院の理科学校教師となる
明治29年 (1896) 3月	健康を害し退職
明治29年 (1896) 4月	名古屋中学校 (愛知一中の前身) の就職
明治29年 (1896) 7月20日	David TODD (トッド) 夫妻の日蝕観測隊に従って枝幸 (エサシ) へ 通訳兼計算を担当
明治29年 (1896) 8月9日	皆既日食 北海道
明治30年 (1897)	岐阜中学校に就職
明治31年 (1898)	同志社に戻る 数学を講ず
明治33年 (1900)	腹膜炎になり開腹手術 後に須磨の浦で療養
明治34年 (1901) 12月9日	快癒し古川のぶと結婚 古川のぶは福井県越前栗田部 (現在の越前市栗田部町) よりただ一人京都の学校へ遊学したと村誌に記されている おとなしい性格で結婚後春太郎にさからったことがない
明治34年 (1901) 3月	第七高等学校造士館が島津公爵家より十六万二千圓及び校地・建物・器具等の寄付にて創設される
明治34年 (1901) 4月	初代館長は札幌農学校出身の岩崎行親
明治34年 (1901) 7月	生徒募集が行われた
明治34年 (1901) 9月	1回生147名入学
明治34年 (1901) 9月26日	授業開始
明治35年 (1902)	同志社で物理学教師となる

	フランス天文学協会 La Société Astronomique de France の1902年の Bulletin に1896 MURAKAMI(H.), à Doshisha-Kioto (Japon) (1265) と記載されている 1896は入会の年、1265は会員番号と思われる 多分1896年度の Bulletin には掲載されていたと思われる 1896年(明治29)にフランス天文学協会 La Société Astronomique de France の会員になっておられるとしてよい
明治35年(1902)10月10日	島津源蔵の好意で「天文学一夕話」を発刊 京都島津製作所島津源蔵発兌定価金七拾五錢
明治36年(1903)9月	七高に赴任 既に数学、物理学、化学の高等教員資格を独学にて取得していた のぶ夫人、長男晴明と次男勉を伴い海路、鹿児島に着く 山下町の官舎に入る 隣家は化学の久保田温郎教授
年月不明	加治屋町へ転居 上町から谷山に通ずる街道から十米くらい離れる「ねこんくすい」(猫の薬) 小路にあった 家から遠くない所、甲突川の土堤へ行く手前に『西郷南州誕生の地』と『大久保利通誕生の地』の大きな石碑が立っている空地があった
明治40年(1907)7月23日	三男忠敬出生
明治43年	四男良貞出生
明治45年(1912)	次男勉ジフテリー症で病死
明治45年(1912)	鷹師町へ転居 千石通りを甲突川の西田橋を渡り少し行き右折し小川を過ぎて二、三軒目の左側の家
大正2年(1913)	雪子出生
大正3年(1914)1月12日	午前10時10分大音響と共に桜島の大噴火が始まる
大正3年(1914)	仏蘭西天文学会 La Société Astronomique de France に桜島噴火の状況を仏語にて報告
大正3年(1914)	常盤町へ転居
大正4年(1915)	原良村小松帯刀邸へ転居
大正4年(1915)	英国皇太子の桜島視察に皇太子だった昭和天皇が同伴され鹿児島に来られた時、解説と通訳をした
大正6年(1917)	五男重康出生
大正10年(1921)	六男清和出生(エキリで病死、3才)
大正11年(1922)	草牟田町へ転居
大正12年(1923)	“On the Hydrodynamic Group-Waves and the Wave-Energy.” 正統二篇を自費出版 欧米の学者に送付
大正13年(1924)12月14日付	Oliber Joseph LODGE へ手紙を送り自説の主張と論文の評価を依頼した
大正14年(1925)4月	忠敬 七高理甲入学

昭和2年春 (1927)	番匠鉄雄牧師から受洗 基督者となる
昭和3年 (1928) 9月30日	「物理学原論」日置郡伊集院町吉田丈作吉田大正堂発行 定価金七圓
昭和6年 (1931) 3月	忠敬 京大宇宙物理学科卒
昭和7年 (1932) 4月	忠敬 名古屋金城女専 (現金城学院大学) 教授就任 河合亀輔牧師五女、さくら子と結婚
昭和12年 (1937) 3月31日	退官 名誉教授
昭和15年 (1940)) - 昭和18年 (1943)	Theory of the Perturbation of the Moon 149pp 記述の終了は 1944年12月9日 とあるが、戦災で焼失したのを残っていたノートと記憶から復活記述をした終了の日を原本が完成した日とした 自費出版の日は編集者 (忠敬) の挨拶では1982年6月10日と記述されている
昭和19年 (1944) 8月10日	「天文と地象」初版発行 恒星社厚生閣発行 定価三圓五十銭
昭和20年 (1945) 5月24日	東京地区の戦災で「天文と地象」紙型もろ共に灰燼に帰す
昭和20年 (1945) 6月17日	午後11時過ぎ米機来襲、警報発令されず、鹿児島市へは全8回来週し空爆は5回目、之5回目の空爆が悲惨な最大の損害を与えた。市街は殆ど完全に焼失。太陰運行論の清書されたノートなど全て焼失
昭和20年 (1945) - 昭和21年 (1946)	Theory of the Perturbation of the Moon 307pp 記述の終了は 1944年12月9日 とあるが、戦災で焼失したのを残っていたノートと記憶から復活記述をした 終了の日を原本が完成した日とした 自費出版の日は編者 (忠敬) の挨拶では1982年6月10日と記述されている なお、印刷は 中本本店印刷所 Nakamotohon Ten Printing Co., Hiroshima となっている
昭和22年 (1947) 6月5日	畑の草取り、「天文と地象」の正誤表を作る 夕刻、腹痛
昭和22年 (1947) 6月6日	床に伏す 家弓医師が診察
昭和22年 (1947) 6月10日	午前8時20分死を自覚することなく安らかに眠った。75年の生涯を時の記念日に閉じる
昭和22年 (1947)	忠敬「村上春太郎伝」を天文学雑誌に掲載
昭和23年 (1948) 4月30日	「天文と地象」再版 定価一八〇圓 地方定価一九〇圓
昭和25年 (1950) 5月	忠敬肺結核発病
昭和52年 (1977) 10月30日	忠敬 私家版“秋津供養”出版 「村上春太郎伝」を含む
昭和60年 (1985) 2月11日	忠敬逝去

謝 辞

まず、村上先生についての書き物を教えて下さりコピーを送って下さった中柴武雄先輩に感謝せねばならないが既に逝去されておられる。遅くなったがご冥福を祈念する。

村上忠敬先生のご子息、處直氏、柏原通子さん、宮永雪子さんのご息女茂木啓子さんからは貴重なお話しと共に幾つかの興味深い資料を送付して下さいました。篤く感謝します。

七高同期で西寮の親友、川野克哉氏にはお忙しい中、また腕の骨折が未完治の中、無理な注文の東京七高会会報の調査を快く引き受けて資料を見出して頂いた。猛暑の中での苛酷な作業だったと思うが心より感謝します。

この原稿の初期の状態の文章に対して貴重な指示を頂いた福井と七高同級の北垣敏男氏と小谷恒之氏に感謝します。

春太郎先生のかくあるべしと思える行動とご長男晴明さんに直接に世話になった話を知らせて下さった川畑平一郎氏に謝意を表します。

著書の検索、国会図書館へのコピーの依頼、幾つかの公立図書館、大学の図書館等への図書の貸し出し依頼など煩わしい手続をして下さった名古屋大学理学部図書室の司書、米津友子さんのご援助に心より感謝します。

岐阜天文台台長の正村一人氏には休日にもかかわらずフランス天文学協会のブレチンの閲覧を特別にさせて頂き、厚く感謝します。なお、このブレチンの所在と岐阜にあることの経緯を知らせて下さった広島佐藤健さんにもお礼を申し上げます。

先生の著書に書かれている仏文、ラテン文、の英訳、仏天文学協会に春太郎先生が報告され要約がブレチンに掲載された桜島噴火の記事の英訳などに快く応じて下さった大阪大学レーザーエネルギー学研究センター Luca BAIOTTI ルカ・バイオッテイ 瑠嘉梅乙亭（特任助教）氏に感謝します。

註

-
- 1) この時は大阪女子短期大学教授、現在は京都教育大学教授、環境教育実践センター
 - 2) 岡本正志氏との文通
 - 2-1) 福井より岡本氏へのメール（1997.5.3.）
 - 2-2) 岡本氏から福井へのメール（1997.5.4.）
 - 2-3) 福井より岡本氏へのメール（1997.5.7.）
 - 2-4) 岡本氏より福井へのメール（1997.5.11.）
 - 3) 七高名簿
 - 3-1) 第七高等学校造士館同窓会名簿 平成2年（1990年）10月25日発行
 - 3-2) 七高造士館で学んだ人々（名簿編）
平成十二年（A.D.2000）十二月十二日発行 七高史研究会 平田信芳
 - 4) 牟田泰三氏から福井への手紙（1998.（平成10年）1.30.）
 - 5-1) 柏原通子さんから福井への手紙（1998.3.1.）
 - 5-2) 柏原通子さんから福井への葉書（1998.3.12.）
 - 6) 七高弓道部中柴武雄氏との文通及び東京七高会会報

- 6-1) 中柴武雄氏から福井への手紙 (1997.7.3.) (「弓友だより」昭和 55 年)
- 6-2) 中柴武雄氏から福井への手紙 (1997.7.16.)
- 6-3) 中柴武雄氏から福井への手紙 (1997.7.28.) (東京七高会会報昭和 52,54 年度)
- 6-4) 中柴武雄氏から福井への手紙 (1997.10.4.)
- 7) 開校記念誌
- 7-1) 「――北辰斜にさすところ―― 第七高等学校造士館 50 年史」昭和四十五年十月五日発行 編者 作道好男、江藤武人
発行者 藤田剛志 発行所 財界評論新社 (株)
- 7-2) 開校九十五年記念誌 平成七年十月廿五日 (一九九五年) 発行 実行委員長 宮原正徳 編集 第七高等学校造士館同窓会
記念誌編集委員会
- 7-3) 開校百年記念誌 第七高等学校造士館同窓会 平成十二年十月廿五日 (二〇〇〇年) 発行 開校百年祭実行委員長宮原
正徳 編集 第七高等学校造士館同窓会 記念誌編集委員会
- 8) 村上春太郎先生の 1 人娘、宮永雪子さんのお嬢さん、茂木啓子さん、三男忠敬先生のご長男、處直氏、ご長女、柏原通子
さんとの手紙、メールによる情報
- 8-1) 柏原通子さんの手紙 (2011.7.7.)
- 8-2) 柏原通子さんのメール (2011.7.9.)
- 8-3) 柏原通子さんのメール (2011.7.15.)
- 8-4) 柏原通子さんのメール 2 つ目 (2011.7.15.)
- 8-5) 茂木啓子さんの手紙 (2011.7.18.)
- 8-6) 村上處直氏のメール (2011.7.15.)
- 8-7) 村上處直氏のメール (2011.8.2.)
- 8-8) 村上處直氏のメール (2011.8.3.)、(2011.8.10.)
- 9) 川野克哉氏の平成二十三年七月二十五日付け手紙による東京七高会会報、
- 9-1) 昭和五十九年度会報 頁 10 日高孝次 (大正十二年理甲卒)
- 9-2) 平成元年度会報 頁 28 清原邦武 (昭和八年理甲卒)
- 9-3) 平成五、六年度会報 頁 1 牧常彦 (大正十二年理甲卒)
- 9-4) 平成十九年度会報 頁 24 城井睦夫 (昭和十七年三月文甲卒)
- 10) 長岡半太郎先生が論文の中でオリヴァー・ロッジ卿の考えに言及している箇所を以下に示す。
投稿された雑誌は英国の Philosophical Magazine S.6 Vol.7, No.41, May, 1904, pp.445-455.LV.
タイトルは
Kinetics of a System of Particles illustrating the Line and the Band Spectrum and the Phenomena of
Radioactivity.
第 2 パラグラフ
The system, which I am going to discuss, consists of a large number of particles of equal mass arranged in a
circle at equal angular intervals and repelling each other with forces inversely proportional to the square of
distance; at the centre of the circle, place a particle of large mass attracting the other particles according to
the same law of force.……
……In his lectures on electrons, Sir Oliver Lodge calls attention to a Saturnian system which probably will be
of the same arrangement as that above spoken of. ………
- 11) 岡本氏からの手紙 (1997.8.22.)
- 12) 村上先生がロッジ卿に送られた手紙と其の封筒のコピー。資料 1 と 2。
- 13) 岡本氏から福井への手紙 (1998.5.24.)
- 14) 上記の手紙と共に送られた講演要旨: 日本科学史学会 1998 年度第 45 回年会 愛知大学豊橋校舎 1998 年 5 月 30 日―
31 日 一般講演 5 月 31 日 A24 「謎の H. Murakami- ロッジと交流した日本人物理学者」
- 15) 初代館長岩崎行親 安政 2 年 (1855 年) 11 月 13 日、香川県三豊郡比地大村にて出生 明治 8 年 (1875 年) 東京英語
学校入学、内村鑑三、太田稲造、宮部金吾らと学ぶ 明治 10 年 (1877 年) 9 月 3 日、同志と札幌農学校二期生として入
学 クラーク先生の道統に接す 明治 14 年 (1881 年) 7 月卒業、卒業成績順は、内村鑑三、宮部金吾、高木玉太郎、南
鷹次郎、足立元太郎、太田 (新渡戸) 稲造、廣井勇、藤田九三郎、岩崎行親、町村金彌 明治 27 年 (1894 年) 3 月 12 日、
鹿児島県知事加納久宣の懇望にて県立尋常中学校教諭赴任 明治 34 年 (1901 年) 4 月、第七高等学校造士館館長 (初代)
大正元年 (1912 年) 9 月、退職、千葉にて静養 大正 7 年 (1918 年) 4 月、大阪の実業家、田中省三氏出資による私
立福山中学校を鹿児島の大隅国始良 (アイラ) 郡福山村に創設し校長 薩州の子弟を薫育、敬天塾と称した 大正 10 年
(1921 年) 8 月、夫妻伊勢神宮参拝、漢詩“国体篇”を賦す 大正 13 年 (1924 年)、福山中学校退職、鹿児島市外の郡元 (コ
オリモト) に住む 同年 10 月亡友の招魂祭を催し、城山に忠芬義芳碑を建つ 大正 14 年 (1925 年) 2 月、岡積勇輔と
共同して鹿児島市に敬天舎を創立。 昭和 3 年 (1928 年) 4 月 24 日、門人戦死者の碑を城山に移し招魂祭典を挙げ、浩
然亭にて懇親会を開き、この碑について口を切らんとする時、突如倒れた、脳溢血だった。 翌翌の 26 日、溘然 (コウゼ

- ン)として逝去 享年七十二歳。(忠芬義芳: 芬芳 (フンホウ) : 立派な名声 溘然 (コウゼン) : にわかに、たちまち)
- 16) 桜島大噴火 大正2年(1913)6月29日から30日にかけて弱い地震が伊集院町を震源として発生。最初の前兆現象。12月下旬井戸水の水位変化、24日には桜島東側海域の生け簀で魚やエビの大量死、大正3年1月島の東北部で地面温度が上昇。1月10日鹿児島市付近を震源とする弱い地震、11日にかけて頻発、微小地震400回以上、弱震33回。1月11日には山頂付近で岩石崩落に伴う地鳴り多発。海岸のいたるところで温水や冷水が湧き出す。12日午前8時から10時にかけて中腹からキノコ雲状白煙沸き出す。12日午前10時5分、西側中腹から黒い噴煙、5分後大音響と共に大噴火が始まる。約10分後南東側中腹からも噴火。噴煙は3,000 m以上に達し、岩石が約1,000 mまで吹き上げられた。大音響や空振を伴い断続的に爆発が繰り返される。午後6時30分噴火に伴うM7.1の強地震発生、鹿児島市内の石垣や家屋が倒壊。1月13日午前1時頃、噴火はピークに達し、火山弾により島内各所で火災発生、大量の軽石が島内及び海上に降下、大量の火山灰が大隅半島などに降り積もった。午後8時14分火口から火柱が立ち火砕流発生、島の西北部小池、赤生原、武の集落がこの火砕流で全焼。午後8時30分溶岩の流出確認。南東側火口からも溶岩流出。1月15日集落赤水と横山が島の西側を流下した溶岩で覆われた。この溶岩流は1月16日には海岸に達し1月18日海上の鳥島が溶岩で包囲される。一方、島の南東側火口から流下した溶岩も海岸に達し72 mもの深さがあった瀬戸海峡も埋め立てられ、1月29日には桜島は大隅半島と陸続きとなった。溶岩流は2月上旬に停止したが、中旬には島の東側の鍋山付近に新火口ができ溶岩流出。大正4年(1915)3月、有村付近に達した溶岩末端部から二次溶岩流出があった。噴火活動は大正5年(1916)にほぼ終焉した。
- 17) 愛媛県越智(オチ)郡伯方(ハカタ)町は現在今治市伯方町となっている。高速自動車道、瀬戸内しまなみ海道を今治から入り初めの島が大島、次が伯方島。此の島の有津(アロウズ)に春太郎とのぶの墓がある。海道は大三島、生口(イクチ)島、因島と進み尾道へ渡る。大三島まで今治市で、尾道市の生口(イクチ)島の南に位置する岩城島、生名島、弓削島は愛媛県越智郡。
- 18) 同志社女子部については、同志社時報81 1986年11月発行のインタビュー記事“～武間富貴同窓会名誉会長に聞く 新島八重のことなど～”を聞き手 河野仁昭 に記述がある。これによれば、テントンさんは新島八重さんと協力して女子部を創設した中心人物であった。
- 19) 寺尾寿(ヒサン) 安政2年9月25日(1855年11月4日)―大正12年(1923年)8月6日 福岡県出身、天文学者、数学者 1888年に東京大学天象台、明治政府海軍観象台、内務省地理局が統合され東京大学天文台が発足、初代台長となり近代日本天文学の基礎を固めた 1908年に日本天文学会を創設。平山修、平山清次、木村榮らは門下生 東京物理学校創設者の一人。
- 20) 大正九年四月一日“太陽”に小説『齋藤先生』を発表、後に『貧しい理学士』と改題し“嵐”に収録。藤村全集 筑摩書房刊行 第十巻 著者 島崎藤村 昭和四十二年八月十日発行 頁163-198。
“私”が亡くなった齋藤先生を回想する話。浅間山麓、小諸の浅間義塾での話。上田から通って来る若い田舎教師、齋藤先生、は理学士で数学を一手に引き受けた上に物理や化学まで教え、“私”は英語を教えた。化学の実験のことも書かれている。この辺りの話が村上先生をモデルにしているのだろう。しかし、この小説は浅間義塾での幾人かの先生と齋藤先生と“私”との交流を回想する話になっている。
- 21) 守永(進士) 晃氏(進士は結婚後の姓) 理科甲類昭和十七年九月卒 京城中学以来北垣敏男(福井と七高、阪大で同級、東北大名誉教授)の一年先輩、七高では共に陸上部、天文部。氏は東大理学部天文に進学、後に運輸省水路部勤務、参事官にて退職。
守永さんが屢々察に来られたのは、京城中後輩で同じ陸上部の北垣さんへの連絡だけでなく、川野克哉さんによれば、川野さん達の部屋付の先輩としての指導というか、諸々の話をされる為のようだった。
ご長女の進士多佳子さんは七高での先輩後輩と言う関係の我々に「父はその後、ハイデルベルグ大研究所に2年、クアラルンプールの工科大学に2年、東南アジアから日本へ来る留学生への教育のNPOとして力を注ぎ、自ら多くの学生を教えていた。東洋大学、放送大学に於いても教えていた。2002年頃小惑星にSINZI(8529)と名前が付けられた。」とメールを送ってこられた。そして驚くとともに悲しいことを知らされた。「父は1995年(平成7年)12月1日、山へ行くと言って出かけられたきり未だに帰って参りません。ミステリーのような消え方でしたので、残された家族(母と弟)は、1%の奇跡をいつまでも、どこかで望んでいるところがあります。家族は、手がかりを追うばかりの日々でした。おそらく遭難だと思います。父は、お世話になった方々に、とうとう何のご挨拶もせずじまいでした。山はもともと好きでしたが本格的には行ってはず、集中して行きはじめたのは(高い山ではありませんが)マレーシアから帰ってからのことです。100山を目指していました」
七高名簿に記載されている住所、東京都北区豊島には守永(進士)未亡人が住まっておられる。
- 22) フランス天文学協会の機関誌 BULLETIN de la SOCIÉTÉ ASTRONOMIQUE DE FRANCE et REVUE MENSUELLE D' ASTRONOMIE, DE MÉTÉOROLOGIE ET DE PHYSIQUE DU GLOBE は天文学、気象学、地球物理学の3分野の月刊誌 此の雑誌の一部が財団法人 岐阜天文台 501-6122 岐阜市柳津町高桑西3-75(事務局 501-3107 岐阜市加納 1186-1 正村一人歯科医師) に所蔵されている。
佐藤健氏(1938年生、1960年広島大卒)から伝えられたことを記す。
大分延岡市立延岡中学校生の時(昭和25年(1950)―昭和28年(1953))、自宅は旭化成社宅、近所に宮永邸があり、

同学年の宮永啓子さんが居られた。啓子さんの母、雪子さんは村上春太郎先生の一人娘。啓子さんの2才年下の邦宏さんから「僕の伯父は天文学者だ」と聞いた。その伯父さんが村上忠敬先生だった。宮永邦宏さんを通じて天文のことを質問し教えてもらっていた。広大へ進み卒業後も含めて29年に及ぶ村上忠敬先生の指導を受けた。先生の没後、さくら子未亡人から10冊程の天文学協会の雑誌が広島市のプラネタリウム館に寄贈された。神戸在住の東亜天文学会会員長谷川一郎氏が「岐阜の方が見に行きやすい」とプラネタリウム館長だった佐藤氏に指示されたので、同じ学会員だった正村一忠氏が創設された岐阜天文台へ移したというのが経緯である。

岐阜天文台は一忠氏没後、ご子息の一人さんが台長を継承されている。所在の町名は岐阜市ではあるが、市の中心からかなり離れた南南西の畑地の中にある。都会の夜の明さが影響しない場所だから辺鄙な所であるのは当然である。此の天文台へ行く交通手段は自家用車のみ状況である。

所蔵されているのは、

- 1902年度 会員表に1896 MURAKAMI (H.) , à Doshisha-Kioto (Japon) (1265) と記載されている興味を持たれたと思われる記事のページを書いた紙を表紙の裏に糊付してある
- 1911年度 ハレー彗星の記事を手書きで写した紙を表紙の裏に糊付けしてある
- 1912年度 興味を持たれたと思われる記事のページを書いた紙を表紙の裏に糊付けしてある
- 1913年度 興味を持たれたと思われる記事のページを書いた紙を表紙の裏に糊付けしてある
- 1914年度 桜島噴火の報告のまとめの記事がある
- 1915年度 太陽、月等の質量を計算された紙が表紙の裏に糊付けしてある
- 1916年度 1917年度 1918年度 同上 なお、夫々の最終ページの下方に先生の手で読了の日付けと製本の日付けを書いておられる。

の9冊。

全ページを読み終えられたことにも感服するが、先生の手で製本されたその方法には脱帽である。装丁は特殊な方法で、どの頁を開いても両頁が平面になる。分厚いピアノ楽譜の装丁と同じ方法である。いつ、どこで、此の装丁法を習得されたのだろうか、あらゆることの知識を貪欲に求める意欲と先生の手器用さに改めて驚きの念を深くする。

- 23) Luca BAIOTTI ルカ・バイオッティ 大阪大学レーザーエネルギー学研究中心 特任助教 イタリア国籍
- 24) 川畑平一郎氏は平成24年2月5日の福井への私信で、村上春太郎先生については伝説的な先生として早くから話を聞いていたこと、そして草牟田の人達が先生の行動をどのように見ていたかを書いてこられた。また、ご長男晴明さんとの接触があったことも書かれてあった。川畑氏は祖父が明治30年に開かれた眼科病院を継がれた三代目の眼科医だったが、平成16年末に閉院された。此の経緯についてはIDENTITY No.5に「眼科川畑病院物語」に詳しく記述されている。



恵那からの花綴り
南基泰◎定価735円



なぜ英語の発音は
むずかしい?
三浦陽一◎定価735円



名古屋の“お値打ち”
サービスを探る
山元貴継◎定価735円



中部大学
ブックシリーズ

アクタ
ACTA

発行・中部大学 〒487-8501 春日井市松本町 1200
発売・風媒社 〒460-0013 名古屋市中区上前津 2-9-14
tel.052-3310008 fax.052-331-0512 www.fubaisha.com